ワンダラー放浪記

島隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワンダラー放浪記

【Ｎコード】
Ｎ８２４２Ｔ

【作者名】
島隼

【あらすじ】
時には瘴獣を退治し、時には遺跡を調査し、時には市民を護衛し、迷子の子猫だって探し出す。
みんなの「なんでも屋」、通称ワンダラー。
ワンダラーを生業とする個性豊かな四人のその日暮らしの生活とはいかに！？
★★ご案内★★
この小説は自サイト「Ｆｏｕｒ　Ｔｒｉｂｅｓ」（ＵＲＬは下の方

を参照）に掲載されている同名小説の重複投稿作品です。
☆☆ご案内２☆☆
この小説は長編「インペリアル・ガード」のサイド（？）ストーリー的なお話になります（内容はまったく関係ありませんが・・・）。
同一の世界の違う場所の話になっていますが、サイドということで世界観の記述が甘いところがあります。不明な点は自サイトの「世界観」のページを見てもらえると読みやすくなると思います。

第一話　【1】

ここは都市同盟の一角を成す街クレスト。
この街の中央を通る大通りから一本それた道沿いに小さな食堂がある。日が沈み、空に眩い星達が瞬き始めてから数刻程が経った頃、その道を挟んで向かい側にある一軒家と思われる建物に背を預け、悲壮感を漂わせた四人の男女が正面を見つめていた。
「危機的状況だな…」
腰にバスタードソードを差し、短く茶色の髪の身軽な軽装をした三十前後の男が誰にともなく呟いた。
「……ああ、覚悟を決める必要があるかもしれん」
その言葉に隣にいた赤毛の髪を後ろに流し、右の頬に十字の傷がある男が同意した。その男は背中に両手持ち専用の大剣を背負い、先ほどの男と似たような服装の他に革で出来た上着を羽織っている。
「なんのだ？」
大剣の男の隣にいる頭にバンダナを巻いたエルフ族と思われる女が、冷たい目線で問いかける。
『餓死・・・・』
剣士二人の声が哀しい響きを含みながら重なった。
「……どーすんのよ？」
『お前が言うなっ！！』
「だって～、、、」
腰に剣を差した男の隣にいる、魔法士と思われる女というか少女が非難の声を上げたが、剣士二人に激しく突っ込まれる。
この四人は通称ワンダラーといわれる、いわゆる『なんでも屋』を生業とする者達である。名前は腰に剣を差した男がカイト、背に大剣を背負っている男がジェイル、そしてエルフ族のエマと魔法士のミーファである。ミーファは年齢が十六歳程でワンダラーの中でもかなり若く、茶色い髪を肩口まで伸ばし所々を髪留めで止め、腰

には魔石が先端にはめ込まれた短い杖を差している。エマは『不老なるエルフ族』のため、年齢は不明。腰にはレイピアを差し、背中に組み立て式の弓を革袋に入れて背負っている。頭の緑色のバンダナの結び目から金色の長い髪が伸び、エルフ族特有の長く尖った耳はバンダナの中に隠されていた。服装も目立たないように人族の衣装をを来ている。

その四人がここで何をしているのかというと、昨日で旅の資金が底をつき、ほぼ丸一日何も食べることができず、何となしに本能の赴くままに食堂の目の前まで来て我に返り、改めて現在の危機的状況を認識したところだった。

そもそも何故こんなことになったかというと、事の発端は三日前に遡る。

ワンダラー達は通常大きな町にあるギルドと言われる仕事斡旋所で仕事を請け負い、その仕事をこなすことによって報酬を得て日々の糧としている。ギルドで請け負える仕事にはさまざまなものがあり、代表的なものは瘴獣退治、遺跡調査、護衛、人探し等である。

四人は仕事を請け負いながら都市同盟を旅していたが、三日前に路銀が寂しくなってきたので、近くにあったこの街に寄りギルドから瘴獣退治の仕事を請け負った。

瘴獣退治はこの辺では割と多い仕事で、国家が存在せず兵隊や騎士団を持たない都市同盟では瘴獣を退治する組織が無いため、瘴獣が発生すると近くの街のギルドに仕事として登録される。

瘴獣とは虫や動物等の死骸に瘴気が取りつき怪物化したものである。めったに発生しないが、瘴獣は見境なく生き物を襲うため発生が確認されると即退治対象となっている。

そして四人が請け負ったのはバーストフライと呼ばれる虫の瘴獣退治であり、瘴獣としては珍しく空を飛ぶ。姿形は蜻蛉に似ている

が、色は赤く大きさは大人と同じくらいあり、火を吐き尻尾のような胴体には無数の棘が生えている。攻撃力は大したことはないが、空を飛び倒し難いため報酬は高めだった。

カイトとジェイルは剣しか使えないが、エマは弓が使えミーファは魔法が使えるからなんとかなるだろうとこれを引き受けることになった。

その翌日、瘴獣がいるというこの街の近くを流れる川を捜索してみると割りと簡単に、というより奇妙な泣き声を発しながら空を跳ぶという目立つことこの上ないバーストフライを見つけた。

四人はすぐに、エマの弓とミーファの魔法、そしてそれに対するカイトとジェイルの声援で攻撃を仕掛けた。動きが素早いため手こずりはしたが、大分弱らせたところでバーストフライが川の上に逃げたのだが、そこでミーファがやってはいけないミスを犯してしまった。

カイトとジェイルの制止を振り切り火の魔法をバーストフライにぶっ放したのである。めでたくバーストフライは火に焼かれ消滅した…が、瘴獣が消滅するとその後に残される輝石が川に落ちてしまったのである。

瘴獣は絶命すると元々死骸の肉体は消滅し、そこには輝石と呼ばれる黒い石が残される。取りついた瘴気が結晶化したものと言われているが、くわしいことはまだわかっていない。そして、瘴獣退治が完了した証拠となるのがこの輝石なのである。

そう、輝石がなければギルドに戻っていくら説明しても報酬はもらえない。

街に戻るとカイトとジェイルは一応ギルドに行って事情を説明してみたが、案の定認めてもらえなかった。肩を落とした二人がエマとミーファの待つ場所に戻ると……、ミーファが最後の路銀を風呂代に使うという暴挙に出ており、結局それ以降食事をすることもできず今に至るのである。

「なんで風呂なんか……」
ジェイルは立っていることも苦痛になったのか、その場にしゃがみ込みながらボソリと呟く。
「だって女の子だもん！！汗かいたらお風呂入るでしょ？」
「ワンダラーが汗嫌いって。そんなんでワンダラーが務まると思ってんのか？」
ジェイルは立ち上がりミーファに詰め寄ったが、ミーファはカイトの後ろに隠れ舌を出した。
「てめぇ～」
「まあ落ち着け、無くなってしまったものをいつまで悔やんでも仕方ない」
「さっすがカイト！！やっぱ過去にこだわらず前向きに生きなきゃいけないよね！」
「けっ！」
「で、どうするんだ？」
黙ってそのやり取りを聞いていたエマが、さすがに呆れたのか冷たい声で遮りカイトを見た。
「そうだな。今日はもうギルドも閉まったろうし、どこかで野宿して明日もう一度ギルドに行って仕事を探そう。うまいこと、前払いか元手がなくても請け負える仕事があるといいんだが」
「ええ！！また野宿～」
ミーファがあからさまな不満の声を発したが、三人はそれを無視し昨日と同じく街の中央にある公園に向かった。

第一話　【2】

翌朝街に活気が出始めた頃、カイトとジェイルは二人でギルドに向かうため大通りを歩いていた。
エマはエルフ故かあまり人が多いところには近づきたがらず、ミーファは雰囲気が嫌いとギルドには付いてこない。
二人はギルドへと向かう道すがら、その背に奇妙な哀愁を漂わせながら、空腹のせいかほぼ無言で歩いていた。
「もう、腹の虫が限界だ……。こんな仕事をしているからいつ死んでもおかしくないが、餓死はやだな。なんとか先払いの仕事を探そうぜ…」
ジェイルが擦れた声で呟く。
「同感だな。しかし、前払いの仕事なんてあるかな？」
「あきらめるな。前向きに生きるんだ！！」
昨日ミーファに言われたことを気にしていたのか、ジェイルはさっきまでの口調と違い力強く言い放った。
「ま、まあ、なんとか探してみよう」
それから二人はまたギルドまで無言で進んでいった。
クレストの街にあるギルドは割と大きく、儲かっているのか建物も石造りの二階建てである。ギルドは依頼者とワンダラーの仲介料で成り立っていた。
中に入ると手前には小さな円卓が数個あり、既に他のワンダラー達が仕事の資料を読んでいたり、何かの相談をしている。二人は奥にあるカウンターに向かうとギルドの店主がきつい眼つきで睨んできた。店主もワンダラー上がりなのか、かなり体つきが良く髪の毛を剃りあげている。
「何度来ても、駄目なものは駄目だ。規則は守ってもらう」
昨日、輝石が無いのに報酬をくれるようしつこく頼み込んだせいか、すっかり嫌われてしまっているようだ。

「いや、違うんだ。昨日はすまない。今日は新しい仕事を紹介してもらおうと思って」
「すぐに仕事に入れて、報酬が高めで、前払いで、依頼人が女の仕事はねぇか？」
「ねぇよ。冷やかしならとっとと帰れ！！」
「チッ」
ジェイルは本気だったのかもしれないが、店主には冷やかしと受け取られさらに機嫌を損ねてしまったようだ。既に磨かれたような頭には血管が浮き出ている。
「ジェイル、余計な条件を追加するな…」
カイトはジェイルを後ろに下げると、自分が交渉に乗り出した。
「待ってくれ、そんな好条件じゃなくていいんだ。とにかくすぐに仕事に取りかかれて、元手の必要ない仕事はないか？」
「……急ぎの瘴獣退治の仕事なら一つある。装備が揃ってるなら元手はいらんだろう。報酬は…まあ、ちょっと特殊な契約だがうまくいけば高額だ」
「瘴獣の種類と数は？」
「不明」
通常、瘴獣退治は瘴獣が確認されてから依頼されるため、種類と大体の数は判明している。
「……他は無いのか？」
「数日後でいいなら隣町までの護衛と、遺跡調査がある」
「数日も待てないんだ」
既に二日近く何も食べていない。これ以上日にちがたてばもう仕事をすること自体が困難になるだろう。
「仕方ない。特殊な契約というのは？」
「瘴獣退治なんだが、公的機関からの依頼じゃなくてな。個人契約だ」
「個人契約？奇特な野郎だな」
ジェイルの感想も無理はない。普通瘴獣が発生したら近くの街や

村の代表者が税金で依頼するものだ。税金で依頼できるのに個人の金でワンダラーを雇って退治しようという者はそうはいない。
「場所が街から少し離れているらしい。それで断られたって話だ。くわしいことは依頼人に直接聞いてくれ」
二人は依頼人の居場所が書かれた紙をもらうとギルドを後にした。

「街から離れてるって言ってたな…。そこまで辿り着けんのか？」
「それでも数日待つよりは、体力がまだ多少ある今仕事したほうがいいだろ」
ジェイルの切ない質問にカイトは哀しい答えを返す。
「一度あいつらの所にもどるか？」
「いや、直接依頼人のところに行こう。どのみちエマは来ないだろうし、ミーファが来るとややこしくなる…」
「…だな」
会うことになっている場所は依頼人の家だったが、ギルドから割と近く大通り沿いにあった。

「でけぇ屋敷だな」
「ああ、貴族か豪商のようだな。貴族だといいんだが」
店主に教えてもらった場所に着き、目の前の門から中を覗くとりっぱな屋敷が見える。
カイトが貴族がいいと言ったのは、貴族は見栄をはって無駄に報酬が高いことがあるが、商人の場合はかなりケチなことが多いからだ。カイトは門の近くにいた使用人と思しき者にギルドから来たことを伝えると、中の広間に招かれた。
中は白く磨かれた壁と床に赤いじゅうたん敷かれ、その上にある立派な長いすに二人は座り依頼人を待った。しばらく待っていると、奥の扉から目が痛くなるような濃い赤と青の民族衣装を纏い、首からいくつもの首飾りを下げ、何故か頭には緑のターバンを巻いた五十歳くらいの男がわざとらしい笑みを浮かべながら近寄ってきた。

「なんつー格好だ。悪趣味な…」
「おいおい。聞こえるぞ」
カイトはジェイルを止めると、立ち上がりあいさつと自分の名前を伝え、立ち上がらないジェイルを紹介した
「お主達か？儂はコイル・ナルド。この街で交易商を営んでおる」
その瞬間、カイトとジェイルの願いは脆くも崩れ去りジェイルは天を仰いだ。コイルは握手を求めて来たので、カイトはなるべく表情に出さないように手を握り、互いに椅子に座った。コイルは椅子に深く座ると大げさな身振りでテーブルの上にあった葉巻を吸い始めたが、二人には勧めてこない。その態度からこの男がケチであることにカイトは確信を持ったようだ。
「ギルドから依頼を受けてきたと思ってよいのか？おぬし達だけか？」
ジェイルの態度が気に入らないのか、コイルは視線をカイトにしか合わせて来ない。
「いえ、仲間はあと二人いますが、とりあえず依頼内容を聞くのは俺達だけで」
「そうか。では時間もあまりないので、早速本題に入ろう」
コイルは二人の前にこの街周辺の地図を広げ、湖らしき場所を軽く指で叩いた。
「この街から徒歩で半日程のところにリリ湖という小さいが美しい湖がある。その畔に儂の古い別荘があるのだが、もう何年も使ってない上に木造で見栄えがしないから立て直そうと思っておるのじゃ」
葉巻の煙をジェイルに吹きかけながら自慢げに別荘の話をしはじめる。ジェイルはその煙に切れかけているように見えたが、一応は依頼人ということと、空腹でなるべく動きたくないのとで何とか耐えているようだ。
「それで？」
カイトはジェイルが暴れ出さないことを祈りつつ話を先に進める。
「ふむ。数日前に解体業者に別荘の解体を依頼したんじゃが、中か

ら物音がすると逃げ帰って来ての。中の安全が確認できるまでは引き受けないと言ってきおった」
　コイルは不機嫌そうに葉巻の煙を吹いた。
「では、俺達に別荘内部の調査と瘴獣がいた場合はその退治が依頼ということですね」
「いや、瘴獣退治だけが依頼じゃ」
　カイトは依頼内容の確認をしたが、コイルは一部訂正する。
「？。いや、今の話では何かの音を聞いただけで瘴獣の姿は誰も見ていないのでしょう？ということは中に動物が入り込んだだけの可能性もあるのでは？であればまず内部の調査が必要かと」
「そうじゃの。じゃが、依頼は瘴獣退治じゃ」
　カイトは嫌な予感を感じたのか眉間に皺を寄せている。ジェイルもコイルに疑惑の目を向けた。
「ちなみに報酬はどのように？」
「瘴獣一匹につき、金貨七枚。他には、まあ、馬車の往復運賃くらい前金で出してやる」
「いなかった場合は？」
「無しじゃ」
　カイトは途中で予想していたようだが、改めて聞いて大きく肩を落とす。
「普通、こういう場合は調査料というものが報酬に入るのでは？そうしないと瘴獣がいなかった場合俺達はただ働きに」
「いやなら他を探す」
　カイト達には他を探す余裕も体力も無い。ジェイルを見ると既に諦め顔で頷いた。
「・・・わかりました。それで契約しましょう・・・」
　カイトはまったく気のりがしていないようだったが、背に腹は変えられず仕方なく契約書にサインをし、馬車代を手にすると、エマとミーファが待つ公園に戻った。

第一話　【3】

公園に戻ると二人はベンチに座っており、エマは公園内で綿アメを売っている屋台を不思議そうに眺め、ミーファはそのエマを背もたれにしながらいつも通り魔法書を怪しげな笑みを浮かべながら読んでいた。

「エマ、残念ながら買う金はないぞ」

「人はどうして綿を食べるのだ？」

ジェイルはエマをからかったようだが、エマは食べたかったわけではなく、そもそもそれが何であるかがわからないようだ。

「綿じゃねーよ。あれは、まぁなんだ砂糖みたいなもんだ。砂糖をああして綿みたいにして食べるのさ」

「砂糖？なら砂糖を舐めればいいだろうに」

「いや、まぁそうだけどよ。ああしたほうがうまそうだろ。気持ちの問題だ」

エマは理解できないという顔をしている。食べ物を必要以上に加工しないエルフ族には奇妙に思えるのだろう。

「仕事が終わったら買ってみるといいさ」

「仕事あったの？」

カイトの言葉に、ジェイルとエマの会話を笑いながら聞いていたミーファが反応する。ミーファはワンダラーの仕事は気に行っているらしい。理由は金ではなく、大きな魔法が使えるからのようだが。

「一応な」

「どんな？」

「ちょっと嫌な感じの瘴獣退治だ」

「ちょっと嫌な感じ？」

「とりあえず場所を変えよう。仕事の場所までは馬車移動だから詳細はその中で説明する」

「馬車代あるの？」

「依頼人がくれたよ」
「ジェイル、エマ行くぞ」
カイトは未だジェイルを質問攻めにしているエマと、本人はまじめかもしれないが適当な説明をしているジェイルを呼んで馬車乗り場へと向かった。

「ええっ！！じゃあ、どんな種類で何匹いるかもわからない瘴獣退治を引き受けたの？」
乗り心地が決していいとは言えない八人乗りの乗合馬車の中で、説明を聞き終わったミーファが非難交じりに声を上げた。四人の他に二人の一般客がいたが、驚いてこちらを目を向ける。
「何匹いるかどころじゃねえ。いるかどうかもわからねーよ。しかもいなけりゃただ働きだ」
ジェイルは依頼人の顔を思い出したのか少し不機嫌になっている。
「なんでそんな仕事受けたの？」
「それしか無かったんだ。しかし、瘴獣一匹で銀貨7枚は悪くない額だ。二匹もいればしばらくは食っていける」
「いなかったら？」
「公園の雑草でも食べるさ」
ミーファは死ぬほど、いやな顔をしている。
「湖が見えてきたぞ」
カイト達の話を聞いていたのかどうかわからないが、ずっと外を見ていたエマが声を上げた。
「この辺りのようだな」
カイトは馬車に止まってもらうと運賃を払い馬車を降りた。街道から少し歩くと森の隙間から見えていただけだった湖が姿を表す。
「きれい～」
ミーファが感嘆の声を上げる。確かに湖面は鮮やかな青に輝き、日の光を反射している。
「なるほど、別荘地には持って来いだな」

「お前ら観光に来たんじゃねーんだ。行くぞ」
ジェイルは湖には特に興味も沸かないらしく、湖畔に見える別荘らしき建物にとっとと行ってしまった。
「風情がないな。だが、観光じゃないのは確かだ。俺達も行こう」
カイトはエマとミーファと共にジェイルの後を追った。

「ここか」
「結構でかいな。他人にはケチだが自分には豪勢に使いやがるな」
「まあ、商人はそういうものだろう」
別荘は聞いていた通り木造の平屋造りではあるが、全面が白で塗られており、部屋数は十数部屋ほどはありそうな大きさで、湖を一望出来るようにするためか家の周りに塀は無い。
「でも、ぼろくない？」
ミーファの言うとおり、庭と思われる場所は雑草が伸び放題、建物のガラスも割れ、蜘蛛の巣も大量に張っていて確かに何かがいそうな気配を漂わせている。
「まあ、数年使っていないらしいからな。ーーーおらよっ！」

ーーーー　バキッ　ーーーー

ジェイルは入り口の扉を蹴り飛ばすと、扉は中央で折れほこりを巻き上げながら中に向けて倒れた。
「ちょっと、壊していいの？」
「いいだろ？どの道建て直すつもりだって言ってたし」
「あ、そう」
「人というのは乱暴なのだな」
「いや、エマ。ジェイルの行ないを人族として一般化しないでくれ…」
エマの感想をカイトが慌てて訂正すると、ジェイルを先頭に四人は内部へと入った。中に入ると広めの玄関らしき場所が広がってい

るが、内部は窓に板が打ち付けてあるためだろうかなり暗い。正面には奥へと続く廊下があり、その先は玄関からの光も届かず暗闇と化している。
「光よ」
ミーファが光球を生み出しそれを自分の杖の魔石に吸収させ、杖をたいまつ代わりにするとジェイルに渡した。ジェイルはそれを受け取り、四人は正面の廊下を、その両脇にある部屋を確認しながら奥へと進んでいった。
かなり長い廊下で奥に進むと右に直角に曲がっている。先頭を行くジェイルが角を曲がったところで急に足を止めたため、後ろを歩いていたミーファがジェイルにぶつかりそうになる。
「ちょっと！急に止まんないでよ！！」
「いるな」
ミーファの非難の声を無視し、ジェイルは正面を睨んでいる。
「ああ、そのようだな」
「何が？」
ジェイルとカイトの言ってることがミーファにはわからないようだ。
「瘴獣だよ」
「なんでわかるの？」
「瘴気くせぇ」
「人は瘴気のにおいが嗅げるのか？」
ジェイルの比喩的な表現を真に受けたエマが驚きの表情を浮かべる。
「エマ…。頼むジェイルの言うことを真に受けるな。瘴気の気配を感じるだけだ」
「人族の言い回しは難しいな…」
「瘴気の気配なんてよくわかるね？どこ？」
「細かい場所まではわからん。ひょっとしたら複数かもな」
ジェイルは笑顔で答えると、そのまま飯の種を探しにさらに進む。

「待て。何か引きずるような音が聞こえる」
また少し進んだところで、今度はミーファの後ろを歩いていたエマが奥の方を指差した。
「聞こえる？」
カイトは耳を澄ましたが、何も聞こえない。
「エルフ族の長い耳はかざりじゃねーんだな」
同じく何も聞こえなかったジェイルが関心すると、エマはジェイルから杖を取り上げ自らが先頭に立って進んでいった。

ーーーー　ズル　ーーーズル　ーーーー

一番奥の部屋まで来ると、エマ以外の三人にも何かかなり重い物を引きずるような音が聞こえる。
「この部屋か」
ジェイルはエマの前に出ながら背中の大剣を抜くと、今度は慎重に扉を開けた。中はやはり暗闇だったが強い瘴気の気配が漂っている。
そして、四人全員が中に入った瞬間、カイトは灯りを持っていたエマに何かが接近する気配を感じる。
「エマ！！」

ーーーー　ドガッ！！　ーーーーズルーーーーーズルーーーー

後ろにいたカイトが咄嗟にエマの腕を引き抱き寄せると、エマが立っていた場所を皺だらけ太い丸太のようなものがすごい早さで通過し、その後ろの壁を激しく壊すとまた戻っていった。
「カイト、すまない」
「いや、それよりなんだ、今のは？ミーファ！」
「あいよ。光よ！！」
ミーファが部屋の天井付近に大きめな光球を生み出すと、室内全

体を明るく照らした。そして先ほどの丸太のような物の正体が姿を現す。
「いやーーー！！」
その姿を見てミーファが悲鳴を上げ、カイトの後ろに隠れた。
「……ミ、ミミズ・・・か？」
カイトも想像していなかった瘴獣に困惑の表情を浮かべている。
「長年ワンダラーをやってるが、ミミズの瘴獣なんて初めてだぞ。これはついに俺も名付け親になれるか」
ジェイルは何故かうれしそうにそのミミズの瘴獣を見ている。ミミズの瘴獣といっても、見た目は確かにミミズそのものだが、長さは大人の身長の三倍程、太さも大人の胴体の二人分はありそうな巨大さであり、その体には何か体液のようなものを纏っているようだった。ちなみ初めて発生が確認された種類の瘴獣は、発見したものが名前を付けられる。
そのミミズが体の前半分を持ち上げ、こちらを見降ろすような格好を取り、伸縮自在と思われるその皺だらけの体は異様な脈を打っている。
「しっかし、ミミズに見降ろされるのも奇妙なもんだな」
ちょうど正面にいるジェイルが巨大ミミズに大剣を向ける。
「ジェイル、気をつけろよ。どんな攻撃をして来るのかわからない」
「なに、俺様の長年のカンによるとこいつは打撃主体だな」

ーーーーー　ブチャアッ！！ーーーーー

ジェイルが自信満々に言った瞬間、ミミズは一瞬体をのけ反ると口と思われる場所から何か濃い茶色の物体を勢いよく大量に吐き出し、ジェイルに浴びせかけた。ジェイルはまともにそれをくらうと、後ろの壁まで飛ばされそのとろみのある液体の中でもがいている。
「ジェイル～！！」
ミーファが声を上げた。

「ぶはっ！大丈夫だ。毒性はなさそうだ。しっかし、なんだこりゃ、泥か。しかも、くせぇ！！」
「えんがちょ」
「うるせぇ！！」
ミーファの間の抜けたセリフに、ジェイルは叫ぶと立ち上がった。
「デカミミズめ。こいつも泥を食ってやがんのか」
「つまり今のはゲロを吐いたということか」
「きったなっ！！」
「ジェイル、すまないが当分近寄らないでほしい」
カイトの正確な分析に、ミーファとエマが的確な感想を伝えるとジェイルがぶち切れた。
「おまえらぁ！！」
「落ち着けジェイル！まずはあいつを倒すぞ！」
「あとで覚えとけよ」
カイトの言葉にものすごく納得のいかない顔をしながらジェイルは立ち上がり、巨大ミミズに対して構えた。巨大ミミズは再度体をのけ反らせると、ジェイルに再度泥を吐く。
「不意打ちでなきゃくらうかよ！！ぶった切ってやる！」
ジェイルは余裕を持って横にかわすと床を蹴って一気に間合いを詰め、飛びあがると上段に構えた大剣を巨大ミミズの頭らしき部分目掛けて振り下ろした。

ーーーニュルルンーーー

「なんだとっ！！」
ジェイルの剣は巨大ミミズのやわらかい体とヌメっとした体液のせいで、まったく傷を与えることもなく滑りぬけてしまった。
「ジェイル！俺がやる！」
今度はカイトが瘴獣に対して間合いをつめ、腰の剣を抜くと瘴獣の胴体を横に一閃する。

ーーーニュロンーーー

が、同じく滑りぬけてしまった。

「こいつ…」

「見かけに寄らず、手強えーな」

カイトとジェイルはとりあえずエマとミーナがいる位置戻るが、剣が効かない相手に顔をしかめている。カイトが次の手立てを考えていると、背後にいたミーファの方から魔力の集中を感じた。

「よせ！！」

「なんで？」

咄嗟に掛けられた声にミーファは火の魔力の集中を解いた。

「ここは木造の館だぞ。俺たちまで焼け死んじまう」

「むむぅ」

「あの体液を魔法で乾かせねーのか？」

「無理無理。水ならともかく、あんなねっとりしたの風で乾かすのは何時間掛かるか・・・」

ミーファは手の平を振りながら答えたが、その表情に魔法が使えないことに欲求不満そうだ。

「カイト、どうするよ？」

ーーー　ビシッ！！　ーーー　ブシュッーーー

ジェイルがそういった瞬間、いつの間に組み立てたのか、エマが背負っていた弓を手に持ち矢を引き絞って瘴獣目掛けて放った。そして、剣とは違い力が一点に集中した矢は見事に瘴獣の胴体に突き刺さる。矢が刺さった部分からは泥と思われる液体が噴出した。

「よし！！……って、おい」

矢が刺さった巨大ミミズは何事もなかったかのように先ほどと同じ体勢でこちらを見降ろしている。

「そういえば、ミミズの体の中はほとんど泥だったな…」
「えーい！これだから単純構造の奴はきらいだぜ！！」
ジェイルが叫ぶと、それに怒ったのかどうかはわからないが、巨大ミミズはまたもや体を反らせると今度は泥ではなく、そのままジェイルに体当たりをしてきた。
「ぬぉ！！危ねぇ！くそ、これならどうだ！！」
ジェイルはなんとかそれをかわし、剣を引き寄せる体重を掛けて一気に突いた。今度は見事に巨大ミミズの体に食い込み泥が噴き出すが、剣を引き抜くと貫いた場所を体液が多い泥の噴出が止まった。
「ええい！！便利な体をしおってからに！！しぼませることもできねぇのか！！」

ーーーズルーーーズルーーー

ジェイルが叫び終わった後、巨大ミミズの背後にあるさらに奥へと続く扉から何かの音が聞こえてくる。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・おい、おい」
カイトは空腹に寄るものかもしれないが、背中に嫌な汗が流れるのを感じる。
「ここはこいつらの巣か？」
「……ジェイル、出直さないか？とりあえず、瘴獣の種類はわかったから対策を練って仕切り直そう」
「賛成だな。空きっ腹でこいつらの相手はきついぜ」
満腹だと相手が出来るのかはわからないが、ジェイルはカイトの提案に同意する。
「エマ、ミーファ！一旦引くぞ！」
カイトの言葉にエマとミーファは頷き四人は部屋を飛び出した。追って来ることは無かったが、四人に向かって激しく泥を吐いている。先ほど、歩いて来た長い廊下を駆け戻ると、途中ミーファが声を上げた。

「ねぇ、この建物って取り壊すんでしょ？」
「ああ、そう言ってたが」
「だよね。よし、外に出たらあたしにまかせて！いい考えがある！！」
ミーファは自信たっぷりにそういうと、一番最初に館から駆け抜けた。それに続いて三人が館を出るとミーファが叫ぶ。
「みんな！！館から離れて！！」
「へ？なんでだ？」
ジェイルはそういいながらも言われたとおりに館から距離を置いた。それを確認したミーファは両手に魔力を集中する。
「おい！！やめろ！！」
「よせ！！」
「・・・・・・・・・それ、やめた方がよくないか？」
「炎よ！！」
それに気付いたジェイルとカイトの静止とエマの疑問を無視し、ミーファは巨大な火球を館に向けてぶっ放す。ちなみにミーファは魔法兵や魔法騎士に匹敵するほどの魔力を持っている。ミーファから放たれた火球は見事に館に命中し、もとが木造であることも手伝い見事に館は大炎上した。ミーファはその炎を見ながら腰に手を当て仁王立ちしている。そして、その後ろでは涙を浮かべながらジェイルが両膝を付き、カイトはあまりのことに呆然と館を眺め、エマは呆れていた。
ミーファは後ろを振り返り得意げにピースサインを出すが、三人の様子に不思議そうな表情を浮かべた。
「どったの？あれならあのミミズたちも逃げられず倒せたと思うけど」
称賛の声を期待していたのか、ミーファは不満そうだ。カイトとジェイルはミーファを見ておらず、ただ呆然と炎を眺めている。あまりのショックに言葉が出ない二人の言葉をエマが代弁する。
「輝石はどうするのだ？」

「……あっ」
ミーファは輝石のことはすっかり忘れていたようだ。
「いや、でも前と違って一応あそこにあるわけだし」
ミーファは慌ててなんとか言いつくろうと、燃え盛る館を指差した。そして、今度はカイトが声を絞り出す。
「……輝石の色は？」
「え？黒でしょ？」
「炭の色は？」
「……黒」
ミーファはやっとカイト達の態度に気付いたようだ普段は周りの空気を読まないミーファもさすがに気まずそうだ。
「み、水の魔法で消して、みる？」
「やめろって。水なんか使ったら輝石まで流れてしまう」
「むぐ……」
「なんとか、水を使わずに消せないのか？」
「陣魔法なら出来ないことはないけど、近寄れないから魔法陣が書けない・・・」
「・・・・・・腹、減ったな・・・」
ミーファのどうにもならないという返事を聞いた瞬間にカイトは空腹を思いだしたようだ。
「…ご、ごめんなさい」
さすがのミーファも二度目のことに反省したようだ。ジェイル既に両手を付いて大粒の涙を流している。
「待つしか、無いか・・・鎮火したら、探そう・・・。これ以上仕事をする体力は無い」
「はい。がんばります・・・」
「ジェイル、終わったことは忘れよう・・・前向きに生きるべきだ」
ショックのあまり泣き続けているジェイルに、カイトは膝を突きやさしく肩を叩いたが、ジェイルの体は巨大ミミズの泥と体液で異臭を放っており、後悔した。

「ミーファのバカヤロー！！」
ジェイルの哀しく恨みがましい叫びがリリ湖半にこだました。
その後四人は、別荘の自然鎮火を待つためにリリ湖の畔に座り、無駄に哀愁を漂わせながら美しい夕焼けを腹の虫と共に眺めた。
「夕日とは、どこで見てもその美しさは変わらないのだな」
エマは夕日の美しさに感動しているようだったが、残りの三人にはそんなことはどうでもよかった。

――　おしまい　――

第二話　【1】

「なんか儲かりそうなのはあるか？」
ジェイルは自分も座っている卓の正面で、同じく仕事内容がまとめられた資料に目を通しているカイトに聞いた。
ここは、都市同盟の一角を占める街クレスト、その大通り沿いにあるギルドである。そして、いつも通りジェイルとカイトが仕事を探しに訪れていた。二人はギルドのカウンターの上にある、通称「飯の種」と言われるギルドに依頼されている仕事がまとめられた資料を手に取り、ギルド内にある小さな円卓で割のいい仕事を探している。
「瘴獣退治は無いな。やり易い仕事なんだが。とりあえず、すぐに取りかかれそうなのは、商人の隣町までの護衛ってのがあるが、移動となると支度金が高くつく。儲けは少ないだろうな。そっちは？」
「似たようなもんだが、割の良さそうな仕事が一つあった。俺の趣味じゃねぇが、人物調査だ。依頼主はこの街の魔法士協会。報酬は書いてないが、お役所系だから結構高いんじゃねーか」
ジェイルは資料の一枚をカイトに見せる。
「人物調査？俺も趣味じゃないな」
「だが、仕事を選べるほど裕福じゃねーしな。四人分の食いぶちを稼がにゃならん」
「・・・まぁな」
ワンダラーのパーティで常時四人というのはかなり多い方である。通常は二人程で、仕事によっては他のワンダラーと組んで四、五人で、というのが一般的である。当然、人数が多ければその分生活費も掛かるため相当稼がなければならないが、大きな仕事はそうそうあるわけもなく、そうなると数をこなさなければならない。
「しょーがねー、これにしよう」
ジェイルはそう言いながら立ち上がると、人物調査の資料を片手

にギルドのカウンターに向かった。そして、店主に仕事受ける旨を伝え契約を交わすと依頼人の連絡先を聞きギルドを出た。
「待ち合わせ場所は？」
「魔法士協会の中だ。行ったことねーな」
「今回はミーファとエマも連れて行こう。魔法士協会ならミーファが居たほうが信用度も高い」
「ああ、ミーファ自体に信用度があるかは知らんが…」
ジェイルは腕を頭の後ろに組みながらカイトを見た。
「あいつも、魔法士協会ではおとなしくしてるだろ…多分」
そう言いながらもカイトは心配そうだ。魔法士協会というのは、その名の通り魔法士達が作った協会であり、魔法士の登録から魔法の研究、教育を行っている機関である。登録されている魔法士に対しては、魔法士に犯罪の疑惑が掛けられた際の弁護も引き受けるため、魔法士からの信用度は高い。魔法が使える者は何か犯罪、特に放火などがあった際は真っ先に疑われてしまうため、犯罪者として名が上がってしまうことが多い。

ジェイルとカイトは話しながら現在の拠点としている安宿に戻ると、エマとミーファが使っている部屋へと入った。
「あれ、ミーファは？」
カイトは部屋の中の窓際にあるテーブルの席に座り、外の通りを眺めていたエマに尋ねた。エマは室内のためかいつもの緑のバンダナは巻いておらず、長い耳が露出していていつも以上にエルフらしい。
「風呂だ」
エマが部屋の内部にある浴室に目を向けながら答える。
「あいつは一体、一日何回風呂に入るんだ…」
「今日は三回目だ」
カイトの言葉を質問と受け取ったエマが真面目に答える。
「いや、そうじゃなくて…」

「？」
「いや、いい…」
カイトも質問した分けではなかったが、エルフ族に人族の言葉のニュアンスを伝えるのは難しく、諦めた。その間にジェイルがエマの向かい側の席に座り、カイトはベッドに腰かけた。この部屋はエマとミーファが使っている部屋で、ジェイルとカイトが寝泊まりしている部屋は別にある。
しばらく三人で話をしていると、浴室の扉が開き、中から大きめのバスタオルを体に巻いたミーファが、もうひとつのタオルで髪を拭きながら出てきた。

「きゃーーっ！！！！！」

ジェイルとカイトが部屋にいることに気づいたミーファは悲鳴を上げながら浴室に戻って行った。
「うるせぇな。小娘の裸になんか興味ねぇよ．．．」
「では、カイトのように見ないようにしたらどうなのだ？」
ミーファの姿に視線を逸らしたカイトとは違い、興味が無い割りには視線を浴室から離さないジェイルをエマが睨む。
「ふっ。見れるものは見る。男の本能だ」
ジェイルは何故か誇らしげで爽やかな笑顔をエマに向けた。
「人族の男というものは…」
「いや、だからなんでエマにとって人族代表がジェイルなんだよ…。ジェイルはどちらかというと特殊な部類だぞ」
「特殊って…」
ジェイルが反論しようとした時にミーファが浴室から顔だけだした。
「変態。いるならいるって言いなさいよ」
「わるい。仕事の話があるんだ。早く着替えて来てくれ」
カイトが浴室の方を見ないようにしている目の前で、未だ浴室を

凝視していたジェイルがエマに蹴られている。
「仕事？ちょっと待って。エマ～、ベッドの上のあたしの服取って～」
エマは立ち上がると「やれやれ」と言いながらも、ベッドの上で脱ぎ散らかされていたミーファの服を取ると手渡した。
「ミーファってある意味一番怖いもの知らずだな」
「ああ」
その行動にジェイルとカイトが関心する。ちなみにエマは百年以上生きていると思われるエルフ族である。
ミーファは浴室で着替えて、未だ濡れたままの髪をタオルで拭きながら出て来た。そのままベッドの横に行くと、自分の荷物から魔石を取り出しなにやら魔力を込めながらエマの隣に座ると、魔石を自分の正面に置いた。
「…なんでお前の髪はなびいてるんだ？」
「ん？これで髪を乾かしてるの」
ミーファが魔石を指差しながら答える。ジェイルが正面のミーファの髪が室内なのに風になびいているのが不思議だったようだ。
「魔石？風の魔法か…。便利なもんだな」
「でしょ。まぁ、変態ジェイルには無用なものだけどね」
ミーファはタオル姿を見られたことに怒っていたのか、まったく関係ないところで変態扱いしている。
「変態じゃ…」
「本題に入るぞ。待ち合わせに遅れてしまう」
ミーファの言葉に反論しようとしたジェイルの言葉をカイトが遮る。
「なんか俺、最近扱いが悪くねぇか？」
「気のせいだ。それより、今回の仕事だが魔法士協会からの依頼で人物調査だ。これから依頼人のもとに行くからミーファにも来てもらいたいんだ」
「人物調査ぁ？…、つまらなそう・・・あたしパス」

ミーファがあからさまに不満そうだ。おそらく魔法が派手に使えそうもないところが嫌なのだろう。
「ふざけんな。むしろお前一人でやってこい！」
ミーファの言葉にジェイルがいらついた声を上げる。
「やーだよー！」
「てんめぇ～・・・」
「えーい、話が進まん！！誰がやるかはともかく、とりあえず話を聞け！！」
「人物調査とはなんだ？」
エマが頃合いを見計らい聞いてくる。
「そのままの意味だよ。特定の人物を調査するんだ。まぁ、何か怪しいことでもしてるんだろう」
「…？」
エマはよくわからないといった顔をしている。
「まぁ、やってみればわかる。で、今回の依頼主、さっきも言ったが魔法士協会なんだ。それで、とりあえず話を聞きにいくときにミーファにも来てもらいたいんだ」
「あたし、ここの魔法士協会に登録してないよ。登録は地元でしてるから」
「そうだろうが、俺もジェイルも魔法士協会ってところは行ったことがなくてな。どうせヒマだろ？」
「ヒマかって言われたらまぁ、、、しょ～がないな～」
「何故カイトには従う…」
ジェイルは不満そうだ。
「これが人徳だよ、ジェイル。エマはどうする？」
「私も行く。興味がある」
そう言うとエマは立ち上がり、つられてカイトも立ち上がった。
「ちょっと待って、まだ髪が乾いてない…」
「……」
「……」

エマとカイトは座り直した。

第二話　【2】

「ここか？」
「そうっぽいね。魔法士協会の旗が立ってるし」
カイトとミーファ、そしてエマの三人は街の西南にある魔法士協会の建物に来ていた。建物は三階建てで割と広く、屋根の中央には魔方陣と二本の杖が描かれた魔法士協会の旗がなびいている。ジェイルは話を聞くのは面倒だからと魔法士協会には来なかった。
三人は入り口の扉までくると、カイトが扉を叩いた。
「すいませーん。ギルドで仕事を受けたワンダラーの者です」
少し待つと扉が開き、中から中肉中背でローブを纏った初老の男が顔を出した。
「ワンダラーの方々か。よく来てくださった」
男は全員を握手をすると愛想良く三人を中へと招き入れ、一階の客間と思われる部屋へと案内された。部屋内部は中央にテーブルがあり、その両側に丈夫そうなソファが並べてある。その片側に座って待つように言った後に男は一度部屋を出ると、しばらくして白髪の髪を肩まで伸ばし、顎にも白い髭を生やした、いかにも偉そうな老人と部屋に戻り、カイト達三人を紹介した。エマはいつも通りバンダナを巻いているため、エルフ族だということには気づいていないようだ。
「儂はこの協会の理事を努めているリガル・バウエンである」
リガルと名乗った男は三人の正面に座った。
「さっそくですが、ギルドの方では人物調査ということまでは聞いていますが、具体的な内容までは聞いていません。誰を調査するのですか？」
カイトはさっそく本題に入る。エマもこういうことに興味があるのか耳を傾けているが、ミーファは出された紅茶を真剣に吟味している。

「うむ。調査して欲しいのは、この街の外れに住むオクラ・トマエルという男だ。魔法の研究者なんだが、そこで何を研究をしているかを調査して欲しいのじゃ」
「何の研究をしているの」
紅茶を吟味していたミーファが魔法の研究という言葉に反応する。
「いや、じゃからそれを調査して欲しいのじゃが、まあ実を言うと何を研究しているのかはわかっている。禁呪じゃ」
「禁呪…」
それを聞いたミーファは複雑な表情をしている。
「何故魔法士協会で調査しないのですか？」
カイトが質問する。この質問は重要である。こういうことを自分達で行わず、ワンダラーに頼む時は何か裏があることが多い。
「う～む。まぁ、ちょっと訳ありなのだが仕事を頼む以上仕方あるまい。実はこの男、今は別件で破門となっているが、元々は儂と同じこの協会の理事でな。この協会のやり方にも人物にも詳しいのじゃ。協会の方でも調査はしたのじゃが、正攻法では尻尾を出さん。証拠が無ければ憲兵に引き渡すことも出来んで。それで、ギルドに調査を依頼したのじゃ。研究で済んでおればいいのじゃが、少々危ない男での。協会出身者の者が禁呪を使ったとなればこの協会の権威が失墜する。その前に何としても捕まえたいのじゃ」
「なるほど。つまり、正攻法じゃない手を使ってでも調べてこいということですね」
「…それは任せる。報酬は成功したら金貨六枚でどうじゃ」
金貨六枚は、人物調査としては破格の報酬である。だからこそ暗に手段は問うなというリガルの真意がカイトには伺えた。非合法なことをしてでも、というところがカイトには引っかかったが、金貨六枚という報酬に負けた。
「…わかりました。引き受けましょう。エマ、ミーファいいな」
「私は構わない」
「え？…あ、うん」

禁呪という言葉を聞いてから無口になっていたミーファが微妙な表情をしている。カイトはなんとなく気になったが、とりあえずは無視した。
その後カイト達はオクラ・トマエルという男の館の詳しい位置を聞くと、魔法士協会を後にした。
「とりあえず、ジェイルのところに戻るか」
門を出た後に宿に戻ろうとしたカイトをエマが引きとめる。
「禁呪とは何なのだ？」
エマには先程の話がよく分かっていなかったらしい。
「いろいろあるが、ミーファに聞いた方早いだろ。なっ」
カイトは一番後ろを歩いていたミーファに話しを振る。
「え？あ、うん。どうせ、ジェイルも聞いてくるだろうから、戻ったら教えるよ」
「どうしたんだ、ミーファ？さっきから元気が無いな？」
「そ、そう？そんなこと無いよ。あは、あはははは」
ミーファはあきらかにわざとらしい笑みを浮かべると視線を逸らした。
「……なんか、後ろめいたことがあるな」
「な、無いよ！！」
ミーファは否定したが、額から汗が吹き出していた。
「まあ、いいや。とっとと戻ろう」

第二話　【3】

「禁呪って何だ？」
宿に戻り寝ていたジェイルを起こすとさっきと同じ位置にカイト以外が座り、カイトはジェイルに魔法士協会で説明を受けたことを一通り説明した。それを聞いたジェイルは予想通りの質問を返してきた。
「だそうだ。エマも知りたがってるし、ミーファ、説明してやってくれ」
カイトは説明をミーファに任せると、自分は先ほどと同じくベッドに腰掛けた。
「カイトは知ってるの？」
「まあ、詳しいわけじゃないが知識としては持ってるよ」
「へ～、そうなんだ」
魔法が使えない剣士のカイトが魔法の知識、しかも魔法士でも知らない者がいる禁呪を知っていることにミーファは意外だったようだが、お互いあまりその辺には触れない方がいいと思ったのか、それ以上は聞かなかった。
「コホン。では、ちょっとだけ禁呪講義を」
ミーファは立ち上がり、得意気な顔で禁呪の説明を始めた。
「禁呪っていうのは、まあ単純に言えば禁止されている魔法のことなの」
「禁止されてるの魔法？そんなんあんのか？」
「うん。いくつかあるけど、有名なのは五つ。まず一つは自然魔法の一つで闇の魔法。これは公的機関以外では研究することも禁止されてるわ」
「なんで？てか、闇の魔法って出来無いんじゃなかったか？」
ジェイルは魔法にはあまり詳しくは無いが、闇の魔法が実現出来ないくらいのことは有名な話であり、知っていた。

「理論的には世界の構成要素の一つである限りは出来るはず。でも、出来た人間はいないと言われてるね」
「出来ねぇのになんで禁止されてるんだ？」
「光や火なんかとは違って闇って実体がわからないの。だから、使えないんだけど仮に使えてしまった場合、どうなるかわからない。ひょっとしたら世界が闇に飲まれてしまうかもしれない危険性を秘めてるの。だから研究そのものが禁止されてるわ。私はそういうのは良くないと思うんだけどばれるとかなりの罪になる」
「実体がわからない？」
魔法が使えないジェイルには、ミーファの言っていることがいまいち理解出来ないようだ。
「そう。闇と聞いて思い浮かべるのはどうしても、黒だったり夜でしょ。でも黒は色であり、夜は時間。闇ではないわ」
「さっぱりわからん」
「ま、まあ。ジェイルに理解出来るとは思って無いけど、、、で、今回のオクラとかいう研究者だけど、多分研究しているのは闇の魔法ではないと思う」
「なんでわかる？」
「闇の研究は世界の構成要素を解明する研究の一環として、公的機関では行われている。魔法士協会もその一つだから研究したいのなら魔法士協会でやればいいと思うし。破門された事で続けられなくなったのなら研究内容をあのリガルって人が知っているはずだもん」
リガルはオクラの研究内容は禁呪ということ以外は知らなかった。
「ってことは他の四つってことか？」
「多分ね。他の四つは全部陣魔法で、通称マリオネットと言われる操りの魔法、スリープと言われる眠りの魔法、瘴気の召喚魔法であるサモン、そしてリカバリと言われる復活の魔法よ。そして、おそらく研究してるのは前の三つのどれか。もしくは全部」
「どんな魔法なんだ？」
ジェイルは禁呪に興味が出て来たのか、身を前に乗り出して聞い

ている。エマも長い耳を傾けている。
「全部名前のままだけど、マリオネットは人の精神に干渉して、まあ要は術者の意のまま操る魔法。スリープは相手を眠らせてしまう魔法。この二つは自由に使われてしまうと犯罪が横行してしまうでしょ。だから禁止されてるの。そして瘴気の召喚は何故禁止かは見当が付くでしょ」
「瘴獣を自由に作れるってことか」
「おお、ジェイル。本当に見当が付いたんだね。ちょっと関心」
ミーファは拍手をして、ジェイルを称えた。
「お前は、俺をなんだと…。だが、召喚の魔法はおもしろいな。使えれば仕事に困らねぇ」
「自分で召喚して、自分で仕事に登録して、自分で退治すんの？」
「ああ、そうだ。便利だろ」
「…ま、まぁ、割と平和的な使い道だね。でも、そういう使い方をするやつばかりじゃないだろうしね。瘴獣を召喚して戦争に使用したり、それを理由に街全体を脅迫したりなんてこともできるだろうし」
「なるほど、そんな使い方もあるか。気付かなかった」
ミーファの言葉にジェイルは素直に感心している。
「ジェイルってワンダラーの仕事以外には興味無いよね」
「ワンダラーの鑑だろ」
ジェイルは誇らしげに言った。
「まあ、いいけど」
「一つ良いか。研究していないと言っていた復活の魔法とは？」
ずっと黙って聞いていたエマが口を開いた。人族の魔法はエルフ族は使わないため興味が沸くようだ。エルフ族もエルフ族特有の魔法があると言われるが何故かエマは使わない。
「復活の魔法が禁止されている理由はちょっと特殊で、危険というわけではなくて倫理上の問題なの」
「倫理上の問題？」

今度はエマの質問が始まった。
「そう。復活の魔法というのは、死者を生き返らせる陣魔法。神を冒涜する魔法ということで禁止されているの。ただ、禁止されなくても成功率はほとんど無いに等しいけどね」
「なるほど。神はともかくとして自然の摂理に反する。確かに許される魔法では無さそうだな。しかし、成功率がほとんど無いというのは？」
エルフ族は人族が信仰する大地母神マテルを信仰しているわけでは無いため、理由は違ったがやはり死者の復活には反対のようだった。
「生き物が死ぬのはそれなりに理由がある。重い病気だったり、怪我だったり、寿命だったりね。肉体が生命活動を維持できない状態になってるから死んでるのに、精神や魂だけを魔法で呼び戻しても生き返ったりはしないわ。可能性があるのは、ショック死とかの突然死ね。それでも魔法自体が非常に難しい上に準備に時間が掛かる。死んだ直後でもない限りはやっぱり肉体が受け皿になれない状態になってしまうし、都合良く準備万端な状況でショック死なんて無いでしょ。だからほぼ無理」
「そういうことか。…しかし、人を復活する魔法があるのなら、…殺す魔法もあるのか？」
エマの表情が厳しい。ジェイルもミーファに視線を注いでいる。確かに存在するば恐ろしい魔法だ。
「…あるわ」
その二人にミーファは得意気な、しかも何故か笑みを浮かべながら答える。カイトも後ろで笑っている。
「ん？でもさっき言ってた五つの禁呪の中にあったっけか？」
ジェイルはそんな二人の態度に怪訝な顔をしつつも、さっきミーファの言った代表的な五つの禁呪の中に入っていないことが疑問なようだ。
「さっき言ったのは代表的なものだけだからね。他にこまごまとあ

るよ。その一つが死の魔法」
「死の魔法がこまごまとした部類なのか？」
エマは眉間に皺を寄せ、信じられないという表情をしている。
「うん。その他大勢の一つって感じ。何故なら成功しないから」
「そんなに難しい魔法なのか？」
「ううん。それほどでも。簡単では無いけど、マリオネットとかリカバリとかに比べたら全然楽よ」
「言ってる意味がさっぱりわからん」
「何故成功しないかというと、諸説あるけど最近の研究で一番有力なのは生き物の死にたくないという精神の防衛本能が非常に強力だからと言われてるわ。それはすべての生き物に対して言えることで、死の魔法を完璧に使っても虫を殺せた実績すら無いそうよ」
「効かない魔法だからその他大勢の部類なのか。だが、自殺志願者とかだったら効くんじゃねえのか」
「自殺志願者だって、頭で死にたいと思っているだけで、生物としての本能が死にたいと思う分けじゃないから無理ね」
ミーファは人差し指を立てながら得意げに説明する。
「なるほど。ジェイルが男としての本能でタオル姿のミーファから目を離さないことと同じということか」
『それは違う』
エマが真顔で見当違いなことを言ったので、ミーファとカイトが真顔でツッコむ。
「ジェイルのは変態なだけ。まあ、そんな訳で、オクラってのが研究してるのは多分マリオネット、スリープ、サモンのどれかよ。もし、マリオネットとスリープを研究してるとしたら、私たちも掛けられないように気をつけないと」
「防げないのか？」
今までずっと話を聞いているだけだったカイトが口を開いた。
「まあ、陣魔法だから魔方陣の中に入りさえしなければ、とりあえずは大丈夫よ」

「なぁに、死の魔法が精神力で弾けるなら他も同じだろ？だったら俺様は掛からねぇよ」
ジェイルは根拠の無い自信を見せる。
「まあ、そうだけど。無理だと思うよ。マリオネットはちょっと特殊な精神干渉だし、スリープは多分防げない。人は心の底では眠りを求めるからね」
「心配ねぇよ！！自分の心配でもしとけ」
ミーファはものすごい疑惑の目を向けている。
「おもしろそうだから俺も行こう。どうするんだ？」
ジェイルは立ち上がるとカイトに目を向ける。
「そうだな。正面から行っても答えてくれる訳も無いし、何か策を練らないとな。潜入するにしてもとりあえずは下見だな。これは俺とジェイルで行ってこよう。あまり多いと怪しまれるし、エマとミーファは建物の構造を見てもわからないだろ」
「む、失礼な」
「わかるのか」
「…何階建てかくらいは…」
「私もそれくらいならわかるぞ」
「…ジェイルと二人で行ってくる」
カイトは疲れた声でそう言うと、ジェイルと共に宿を出た。

第二話　【4】

「あそこか」
カイトとジェイルは魔法士協会のリガルに教えてもらった館から少し離れた小路に来ていた。そこから間に数軒越しに調査対象であるオクラ・トマエルの館とおもわれる二階建ての建物が見える。
「だな。が、ここからじゃ構造がよくわからねぇ。もう少し近づいて一回りしてみようぜ」
二人が館に近づいてみると個人の館にしてはかなり大きいほうで、木造二階建てでかなり年季が入っている。そして、館の周りには大人の身長の二倍程の高さの塀で囲まれていた。二人はその塀の周りを怪しまれないように館からは視線を外して歩いている。
「この塀は厄介だな。無理に飛び越えると目立ち過ぎる」
「ああ、だが見張りの姿は無い。夜やるか？」
「まあ、忍び込むなら夜だが、証拠を掴むとなるとそれなりに館を調べて回らないといけないしな。さすがに中には何人かはいるだろうし、怪しい研究の証拠が見つけやすい所にあるとも思えない。そう長時間探すことはできないだろうから中の見取り図みたいなものが手に入ればいいんだが。こんな年季の入った建物では無いだろうな」
「無理やり侵入して、オクラってのを見つけてふん縛って脅して吐かせるってのは？」
「…吐けばいいが、吐かなかったら俺たちはただの強盗になってしまうよ」
二人が正門のある側まで歩いてくると、馬車が一台二人を追い抜き正門から中へと入っていく。
その馬車の横にある窓から、短い黒髪で顔は皺だらけの老人の姿が見えた。
「見たか？」

「ああ、あれがオクラだな。根が暗そうな奴だったから間違いねぇ」
「どういう根拠だ。だが、そのようだな。このまま正門を通りすぎよう」
二人は正門の前まで来ると、門は閉まっていて中を見ることは出来なかったが、ジェイルがあるものに気付く。
「おい、カイト。これだ」
親指で正門に何枚か張ってある紙を指す。その表情は楽しそうだ。
「ん？……本気か？」
「ああ、いい手だろ。怪しまれずに中に入れるし、動き回ることも可能だ」
「お前がやるのか？」
「んなわけあるか！条件にも合わねぇ。エマが出来るとは思えねぇから、ミーファだな」
「まあ、とりあえず本人に聞いてみるか？」
カイトはあまり気のりはしていないようだったが、他に手も見当たらないため張り紙を一枚剥がすととりあえず宿に戻ることにした。

「メイド～！？あたしが？」
ジェイルからオクラの館に張ってあった張り紙を渡されたミーファが叫ぶ。今度は先ほどとは違いカイト達の部屋に集まった。
「ああ。ナイスアイディアだろ。条件にもピッタリだ」
ジェイルはさっきから楽しそうだ。
「メイド募集（条件：住み込み。若い女性に限る。）。…メイドとはなんだ？」
ミーファから張り紙を受け取ったエマがその張り紙を読み上げると、内容が理解できないためカイトに視線を送る。
「まあ、言うなれば家のお手伝いさんみたいなものだ。料理を作ったり、掃除したり、洗濯をする人を雇うんだよ」
「人族というのはそんなことも自分で出来ないのか…」
エマはため息混じりに呟いた。

「いや…そういうことでは…。俺たちは自分でやってるし…」
カイトもため息混じりに呟いた。
「てゆーか、条件が怪しすぎない？というより、イヤらしすぎる…」
「わかってないな。それが男のロマンなんだよ」
ジェイルは何故か開いた窓から遠くの山を眺めて呟いた。
「お前、そればっかだな。だが、今回のこれは断ってもいい。すこし危険だ」
「え、なんで？やるけど？」
「え、やるの？」
カイトはミーファに助け船を出したつもりだったが、ミーファは何故か割とやる気だった。
「まあ、ちょっと条件が気になるけど結構興味あるし。やるよ」
「なんだ、お前メイドになりたかったのか？」
未だ遠い目をしていたジェイルにも聞こえたのか、拍子抜けしている。
「違うって…オクラって奴の研究の方。まあ、危ないと思ったら館を吹っ飛ばしてでも逃げてくるから大丈夫」
「おいおい。せめて扉を破壊するくらいにとどめてくれ」
ミーファが得意気に言った危険なことをカイトが制止する。
「まあ、俺たちも館の近くにいるから何かあったら大声で叫んでくれ。乗り込んでいくからさ」
「りょーかーい」
「だが、ミーファ。お前、メイドなんて出来るのか？」
どちらかというとミーファはそういうことが出来なさそうに見える。
「失礼な。大丈夫。うちに結構居たし」
「うちに…」
「いた？」
カイトとジェイルが驚く。エマの表情は変わらない。
「お前、ひょっとしていい所のお嬢なのか？」

ジェイルが疑惑の目をミーファに向ける。
「え？……あは、あはははは…今日はもう遅いから、行くの明日の朝でいいよね？それじゃ、おやすみ～」
ミーファはそういうと、逃げるように自分の部屋へと行ってしまった。
「怪しすぎる」
「なんだかよくわからないが、とりあえずミーファが潜入して調べるということなのか？」
エマが立ち上がりながら聞いてきた。
「まあ、そんなところだ」
「そうか、私も見てみたかったのだが仕方ないな。私もそろそろ部屋にいく」
「ああ、俺たちも今日は早めに休むよ。なっ」
カイトはジェイルの方を見たが、ジェイルは心外そうな顔をしている。
「なんで？俺はこれから街に繰り出してくる」
「…好きにしてくれ。俺は先に寝る」
エマとジェイルが部屋を出ると、カイトは風呂に入り早めに眠った。

翌日の昼前、カイト達の部屋にカイトとエマがいた。早朝、四人はこの部屋に一度集まると、ミーファがメイドとしてオクラの館で住み込みで働きながら内部の確認をし、明日の昼に館を抜け出してもう一度ここに集まることにした。ミーファが館で働いている間はカイトとジェイルが交代で館の周りで待機し、現在はジェイルが行っている。
「何か禁呪の証拠は見つかると思うか？」
エマが窓の外を見ながらカイトに聞いた。
「無理だろうな。そう簡単に見つからないとの自負があるからメイドなんて募集しているんだろうし。だが、館の内部構造と人数、そ

して内部から手引きが可能になれば潜入もやりやすくなる」
「なるほど。では、我々も行くことになるのか？」
エマは窓の外からカイトに視線を移した。
「多分な」
「それは楽しみだ」
笑みを浮かべながら再度視線を窓の外に戻した。
「……エマ、人族の生活って楽しいか？」
「ん？まあ、エルフの生活よりは刺激的ではあるな。エルフの村は平和ではあるが、何も変わらぬ日々を何百年も淡々と続けているだけだ」
「へ～。俺はそういう生活も嫌いじゃないけどな」
「人族程の寿命ならそういう生活も悪くはないのだろうが、我々には永遠の時がある。あまりそういう生活を続けると感情が希薄になるのだ」
「感情が希薄？」
「気にするな。お前たちには理解できないことだろう」
「？」
何かを思い出したのか、エマの表情は少し寂しげに見えた。
「そろそろジェイルと交代ではないのか？」
「お、そうだな。ちょっと行ってくる」
カイトはジェイルと交代するために部屋を出て行った。

第二話　【5】

「といった感じね」
「やっぱり簡単には見つからないか」
「うん。とりあえず、すぐに入れるような部屋にはそういうものは何も無かった」
　次の日の昼、カイト達三人は館を抜け出して来たミーファと宿で合流し、中の状況を確認していた。カイトとミーファのやり取りをベッドに腰かけて聞いていたジェイルがミーファをジッと見ながら突然口を開く。
「ミーファ、お前服の好みを変えたのか？」
　その表情はあきらかに笑いを堪えている。
「違う！！オクラの趣味！！これがメイドの制服なの！！あいつ超エロオヤジで、いやらしい目で人のことを舐めまわすように見るし、やたらと触るし、そのくせに名前は覚えないし！！この恰好でここまで来るの超恥ずかしかったんだから！！」
　ジェイルが気になるのも無理はない。ミーファの恰好は淡い赤の魔法士用とも思えるローブを来ているが、その丈は以上に短くふともももまでしかないため、足はほぼ全部出ている。靴下は履いてはいけないらしく、素足にハートマークの入った靴を履き、頭にはフリルの付いた髪飾りをしている。
「笑うな～！！」
「いってぇ！！」
　ついに我慢できなくなって、吹き出したジェイルの顔面にミーファの蹴りが飛んだ。
「まったく…」
「？。私はミーファの恰好は悪くないと思うが」
　エマがジェイルが何がおかしいのかわからないという感じだ。
「え？そ、そう？」

予想外なことをエマにいわれ、ミーファは思わずエマの前で一回転してポーズをとる。
「可愛らしいではないか。エルフ族の衣装でこういうものは無いから私も着てみたい。それは丈が合わないだろうが」
エマとミーファでは身長がかなり違う。
「エマがこの衣装を…」
ジェイルは頭の中で想像しているのか、顔が徐々に怪しい方向にほころぶ。
「ジェイル…だらしない顔にさらにエロさが増してるよ…」
ミーファはほとんど軽蔑するような目でジェイルを見ている。
「って、カイト！！いつもならこういう会話を途中で止めてくれるのに、なんで何も言わないの？」
「え？あ、ああ、そうそう。そろそろ本題に」
カイトは言われて慌てて会話の軌道修正を行おうとするが、そんなカイトにミーファが疑惑の視線を向ける。
「カイト…まさか、あんたまで…」
「いや、違う！え～…ちょっと頭の中で作戦をだ…そう」
そう言ったカイトの肩をジェイルが強く叩いた。
「いてーな」
「カイト！！わかるぞ、お前の気持ち！！乳臭い小娘が着てもおもしろいだけだが、エマが着たら結構萌えるんじゃないかと思うその心！！それこそが、男のロマンだ！！」
ジェイルが窓の外の何かを指差し声高らかに男のロマンをうたい上げるが、その後ろでミーファが眉間に皺をよせながら怒りに震えつつ、魔力を集中している。
「風よ！！！！」
「ぎゃーー・・・・」

ーーーードガッーーーーー

ミーファの怒りの風の魔法でジェイルが二階の窓から外に吹き飛ばされた。
「ジェイル、大丈夫なのか」
窓際にいたエマが下でピクピクしているジェイルを見下ろしながら、心配そうに呟く。
「ま、まぁ、これくらいでくたばるような奴じゃない」
カイトも下を覗き込んだ。
「カイト、あんたも飛ぶ？」
ミーファは額に青筋を立てながら、にこやかにカイトに問いかける。その手には既に魔力が集中されている。
「いえ、結構です…」
「ミーファ、怖いぞ」
さすがのエマも、顔が引きつっている。
「ほ、本題に入ろう」
「どうぞ」
ミーファは魔力の集中を解くと、エマの隣りに座った。
「オホン。で、えーと、なんだったか。あ、そうそう、すぐ見つかる所には何もないんだよな」
「そう、でも怪しい所はあったよ」
「怪しい所？」
「うん。あの館、地下があるの。で、オクラの奴は夕方くらいから夜遅くまでその地下に籠ってた。見に行きたかったんだけど、地下に降りる階段に二人見張りがいて行けなかったの。怪しいでしょ？」
「怪しすぎだな。見張りってのは？」
「傭兵か何かだと思う。武器は持ってなさそうだったけど、腕っ節は結構強そうだったよ」
「やはり、俺達も中に入る必要がありそうだな。ミーファ、今夜とか俺達を手引きできるか？」
「うん。夜遅い時間なら大丈夫。中はオクラとメイドはあたしを含めて五人、見張りの男は二人だけだと思うから。地下はわからない

けど、とりあえず出入りは無かった。メイド達は夜寝ちゃうし」
「よし。じゃあ今夜侵入しよう。あまり長くやっててても怪しまれるだけだ」
「りょーかい。じゃあ、今夜ね。あたしはそろそろ戻らないと。あまり抜けてる怪しまれるから。あ、見張りはもう大丈夫だよ。とりあえず危険は無さそうだから」
「ああ、気を付けてな」
「あいよ」
そう言うとミーファは宿屋を出てオクラの屋敷へと戻って行った。
「・・・ジェイル、戻って来ないな」
「まだ、下でピクピクしているぞ」
エマが指差した方には、うつ伏せで足と手がピクピクと動いているジェイルの姿があった。
「・・・結構、効いたようだな・・・」

第二話　【6】

その日の夜、オクラの館の正門とは逆側の塀の外で、カイト達三人は待機していた。カイトとジェイルは館の塀に背を預け、エマは二人の正面に立ち話をしている。
「体中が痛ぇ。くそ~、ミーファの奴」
「人族というのは丈夫なのだな。我々では骨折くらいはしていそうなものだ」
エマは素直に関心している。ジェイルは体中痛がってはいるが、まったくの無傷であることに驚いているようだ。
「いや、普通の人族は骨折してるって・・・」
「まぁ、俺様くらいになると、このくらいはなんでもねぇよ」
「というか、自業自得だしな。これで怪我してたらカッコ悪いことこの上ない」
「自業自得ってお前な。俺はお前の心の声を代弁してたんだぞ」
「お前と一緒にするなよ」
「じゃあ、おめー本当にあの時想像してなかったのか？」
ジェイルの言葉に思わずカイトはエマを見た。エマは何を言っているのかわからないという感じでキョトンとしている。
「・・・・・・そろそろ、時間だ。行くぞ」
「ごまかしやがったな・・・」
カイトはジェイルの言葉を無視し、塀にある裏口と思われる出入り口の近くに寄った。しばらく待っていると館側から裏口の扉を誰かが叩いた。
「来たぞ」
カイトも同じくその扉を叩く。すると扉が館側から開けられミーファが顔を出した。
「ごめん。ちょっと遅れた」
「大丈夫だ。中は？」

「オクラの姿が見えないけど、多分地下。後は見張り以外はみんな寝たよ。あ、ジェイル。無事だった？」
カイトの後ろにジェイルを見つけると、詫びれることもなく笑顔で話しかけた。
「当たり前だ！！まったく・・・」
「さて、中に行くか。地下室への場所は？」
「ついて来て。窓からも見えるから一旦外から見せるよ」
カイト達三人はミーファの後に続き庭へ入り、館の窓の一つで壁際によった。ミーファは声を出さずに中を見るように指で合図している。
「あれか・・・」
カイトが窓から中をそっと覗きこむと下へと続く階段の所で体つきの良い男が二人、あくびをしながら立っているのが見えた。それを確認するとカイトは他の三人に屈んで寄るように合図をした。
「傭兵だな。俺とジェイルでなんとかしよう。ミーファ、あいつらの気を引けるか？」
「出来ると思うけど、大丈夫？暴れると騒ぎになるよ」
「心配するな」
そう言うとカイトは軽く笑った。
「まあ、まかせるけど。じゃあ、みんなはあっちに扉があるからそこから入って。鍵は開けといたから。入って真っ直ぐ進んで突き当たりを右がさっきの廊下。あたしは逆から入ってあいつらの気を引くね」
「ああ。じゃあ、後でな」
カイト達はミーファと一度別れると、ミーファの言われた扉に向かった。
「ここだな」
ミーファに言われた場所に来ると、館の裏口と思われる扉がある。
「行くぞ」
カイトはジェイルとエマを見ると二人は無言で頷く。カイトが扉

を開け周りを警戒している間にジェイルとエマが音を立てないように内部へと入った。中はかなり暗いがカイト達もしばらく外で目を慣らしていたため、見る分には問題が無かった。ジェイルを先頭にゆっくりと進んで行くと、ミーファの言っていたとおり右に曲がれる角があった。そこで、ジェイルが後ろの二人を手で制し、ゆっくりと角の先をのぞき見ると二人の見張りの姿が見えた。

「いたぞ。ミーファはまだ来ていないな」

「距離は？」

エマを挟んで後ろにいたカイトが聞く。

「十二、三歩ってところだな。お、ミーファが来た」

ジェイルからミーファが逆側から見張り達ににこやかに近付いて行く姿が見える。

「・・・・・・あいつ、色仕掛けしてねぇか？」

「え？」

カイトもエマ越しにのぞき見ると、確かにミーファはにこやかにローブの裾を少しめくっているように見える。見張りの二人もカイト達に背を向けミーファに近づきなにやら話しかけていた。

「色仕掛けとはなんだ？」

エマは見ても意味がよくわからないらしい。

「エマにも是非覚えてもらいたい男の気を引く高等テクニックだ」

ジェイルが真顔で答えた。

「本当か？」

ジェイルの言葉はいまいち信用できなくなってきたのか、エマをカイトに確認する。

「男の気を引くテクニックには違い無いが、エマは覚えなくていい・・・」

「そうなのか」

エマは何故か残念そうだ。

「それより、そんなに長くは持たないだろ。とっととやろう」

「だな。俺は左をやる。カイトは右の奴にいってくれ」

「ああ」
ジェイルはカイトに見えるように指を三本立てると、一本づつ折っていく。そして、最後の一本を折ると同時に二人は飛びだし、音を立てずに一気に見張りに接近すると手刀を首筋打ち付けた。見張りの二人は悲鳴を上げることも無くその場で卒倒する。
「おお、すごーい」
ミーファは音を立てないように拍手した。
「ミーファ、お前さっき色仕掛けしてただろ？」
「えっ？うん。だって気を引くんでしょ？」
「お前・・・以外と自分に自信満々だろ？」
ジェイルの言葉に何故かミーファは胸を張る。
「当然！」
「そ、そうか・・・」
「そんなことより、ミーファ。近くに空いてる部屋は無いか？こいつらを隠さないと」
ジェイルとミーファのやり取りの最中にエマと二人で持ってきたロープで見張りを縛ったカイトが割って入った。
「あ、ここがいいよ。倉庫になってる」
地下へと続く階段のちょうど正面の部屋をミーファが開ける。
「よし、ジェイル」
「おう」
カイトとジェイルは見張りの二人を倉庫に運び入れ、中に備品の一つとして積まれていた布できつめに猿ぐつわをし、柱に縛り付けた。
「さてと、行くか」
カイトの言葉に三人は頷くと倉庫を出て階段から地下へと降りた。
「暗いな。窓が無いからか」
ジェイルが階段を下まで降り切ったところでその先の通路を見ながら呟いた。確かに通路の奥は闇に包まれている。
「明り付ける？」

ミーファが杖を構えた。
「やめとけ。相手が魔法士なら魔力を集中すると感づかれる」
ジェイルに止められ、ミーファはしぶしぶ杖を腰に戻した。魔力は目に見えるものではないが、魔法を使うために魔力を集中すると、その気配に気付ける者も多い。まして、魔法士であれば尚更である。
「このまま進むしかねぇな。まあ、人の気配しねぇしいきなり出くわすこともねぇだろ」
ジェイルを先頭にミーファ、エマ、そして最後尾にカイトが付き地下を進む。外の庭の下まで地下は続いているらしく、かなりの広さがあった。一度突き当たりの角を曲がったところでジェイルが明りが洩れている部屋に気付き三人を手招きした。
「あそこにオクラが居そうだな」
四人はそっと近づき、少しだけ空いている扉から中を除くと、中には黒いローブを来た老人が魔石の明りの灯された机で何かの本を読んでいるのが見える。四人はそれを確認すると、一度その場を離れ角の所まで戻った。
「あれが、オクラか？」
「うん。間違いない」
カイトの問いにミーファが小声で答える。
「やっぱり、ここで何かの研究をしていることは間違いないな。さて、どうするか」
「証拠とは何を探せばよいのだ？」
エマがカイトに聞く。
「そうだな。おそらく研究成果を何かに書き留めているだろうから、そういうものが見つかればいいんじゃないか」
「手分けして探すか？」
「ああ、地下にはオクラ以外はいなさそうだから他の部屋を片っ端から見ていこう」
カイトがそう言うと、四人は別れ各々別々の部屋へと入って行った。

第二話　【7】

「この部屋には無さそうだな」
カイトが入った部屋には使われていない部屋なのか、特に何かあるような部屋には見えなかった。カイトがその部屋を出ると少し離れた部屋でジェイルが手招きをし、他の三人を呼んでいるのが見えた。ミーファとエマはカイトよりも先にジェイルの部屋に向かっている。
「どうした？」
ジェイルが調べている部屋に入ると、そこは先ほどオクラがいた部屋と似たような部屋だが机は無く、壁際にはいくつもの本棚が並べらおり、中央は何も無い空間になっている。
「この部屋の本、手書きの本が多い。研究成果を置いている部屋っぽいぜ」
「本当か。よし、この部屋の中の本を手分けして調べてみよう」
カイトの言葉に三人が無言で頷いた。そこにある本はジェイルが言うとおりオクラが今まで研究してきた事の成果が記されているようだったが、大半は合法的な内容だった。
「それっぽいのはねぇな」
ジェイルが呟いた瞬間、すぐ隣りで別の本を見ていたミーファが突然大声を上げる。
「ああ！！これだ！うぐぅ・・・」
「ばかっ！」
ジェイルは急いで手でミーファの口を塞ぐと、ミーファはもごもごしている。
「ぶはぁ。ご、ごめん。でも、見てこれ？」
ジェイルが手を離すと、ミーファはカイトとエマも呼び、持っている本を開いて見せた。が、見てもすぐにわからないようにするためか、古代文字で書かれていて三人には読めなかった。

「なんて書いてあるんだ？」
カイトの問いにミーファは深刻な表情をしている。
「こいつ、恐ろしい研究をしてる。これはマリオネットの応用で・・・」
「誰じゃ！！」
ミーファが説明を始めた直後に部屋の魔石が灯り、扉の所に黒いローブを来た皺だらけの老人、オクラがいた。
「げ、ばれた。ミーファ、お前のせいだ」
「ごめん・・・」
ジェイルがミーファの頭を小突くとその頭をさすりながら申し訳なさそうにしている。
「でも、もう関係無いわ。証拠は手に入れた」
ミーファはそう言うと、人差し指をオクラに突きつける。
「オクラ！！あんたの野望はこれでおしまいよ！！こんなおそろしい研究は続けさせられないわ！！」
ミーファは指を射している手とは逆の手で先程の本をオクラに見せている。
「貴様は！！メイド五号！！」
「だれが五号だ！！」
「おのれ、さては魔法士協会のまわし者だったか！だが、それを見られた以上、生きて返すわけにはいかないぞ」
オクラは部屋の中に入ると、自らの杖を前に出した。同時にミーファも本をエマに渡し、自分の杖に持ち替えた。
「ばかめ」
オクラはそう言うと、杖を床に付き魔力を込めた。すると、床の所々が青白く光出した。
「ん？この床、何か彫ってあるぞ？」
それに気付いたカイトが床を指差すと確かに大きな円に古代文字で何かが彫られている。
「へ、ああっ！！これ、やばい！みんな魔法陣の外に出て！！マリ

オネットよ！！」
「遅いわ！！」
オクラは魔力が込められた魔法陣に『力ある言葉』を唱え、魔法陣の力を発動しにかかった。
「くそ！！」
ミーファの声を聞いたカイトがミーファを担ぎ魔法陣の外へ飛び出す。しかし、エマは反応が遅れ、それに気付いたジェイルがエマを魔法陣の外まで付き飛ばした。が、自分が間に合わない。
「うがぁ！！」
魔法陣の中でジェイルが苦しそうな声を上げる。
「ジェイル！！」
助けられたエマが駆け寄ろうとするが、カイトがそれを止めた。しばらくその状態が続くと、魔法陣から光が消え、ジェイルも魔法陣の中で虚ろな目をしながら立ち尽くしている。
「三人逃がしたか・・・まぁ、いい。おい、大男！そいつらを斬れ！ただし、メイド五号ともう一人の女は殺すなよ。儂が後でたっぷりと可愛がってやる。ひっひっひっひ」
オクラは不気味な笑い声を上げると、部屋から出て行ってしまった。
「おい、待て！！」
カイトがオクラを追うとするが、ミーファがカイトの手を掴み制止する。
「まって、カイト！！ジェイルが！」
ミーファの言葉にジェイルに目を向けると、背中に背負っていた大剣を抜き、あきらかな敵意をカイト達に向けていた。
「おいおいおい。本当かよ。ジェイル！！俺達がわからないのか？」
カイトの呼びかけにジェイルは答えない。
「多分、完璧にマリオネットに掛かっちゃった。解かないと、術者の言うことしか聞かないと思う」
「解けるのか？」

「解呪はできるはずだけど、私はやったことないよ・・・」
「知識は？」
「微妙に・・・うわぁ！」

ーーー　ギィン　ーーー

突然、ジェイルが一気に間合いを詰め斬りかかって来る。カイトは両側にいたエマとミーファを付き飛ばすと、腰のバスタードソードを抜いてその剣を受け止めた。
「ミーファ、しばらく俺がジェイルの相手をする！！その間になんとかしろ！！」
カイトはジェイルと剣を合わせながら叫んだ。
「ええ！！マリオネットの解呪って難しいんだよ！！」
「だからってジェイルを斬るわけにはいかないだろ！」
「そりゃそうだけど・・・。う～ん、わかった、なんとかがんばってみるよ。エマ！！手を貸して！ここみたいに床が広くてまだ魔法陣が彫られていない部屋を探して！」
ミーファの言葉にエマが頷くと、二人で周りの部屋を探しにいった。
「さてジェイル、まさかお前とやり合うことになるとはな」
カイトは剣が合わさっている個所を土台に後ろに一度離れると、ジェイルもカイトを追い、今度は横に薙いで来る。

ーーーキィンーーー

カイトはそれを剣で受けると、両者は一度離れて対峙した。
「まったく、お前とは一度勝負してみたいとは思っていたが、こっちは手が出せないとはとんだハンデ戦になったな」
カイトは攻めることなく、ジェイルの斬り込みを防いでいるが、ジェイルの剣は両手持ち用の大剣であり、カイトは片手、両手のど

ちらでも使えるバスタードソードである。カイトの剣の方が使い勝手はいいが、こと攻めに関してはジェイルの剣のほうがかなり強力である。それを攻めずに受け続けるのはかなり厳しいと思われた。
　互いに様子見ためかしばらく対峙していたが、攻撃できないカイトをよそに、ジェイルは大剣を一度下げると今度は下からの斬り上げてくる。カイトはそれに対し剣を打ち付けて受けるが抑えきれず、体を浮かされバランスを崩してしまった。
「なんだと、この馬鹿力が！」
　バランスを崩したカイトの首を目掛けて今度は大剣を横に薙いだ。カイトはそれをしゃがみこんで間一髪かわす。
「危ないな。そっちは躊躇無しかよ」

第二話　【8】

「ミーファ！！この部屋空いているぞ！！」
エマの声にミーファがその部屋に掛け込む。
「あ、いい感じ」
「出来そうか？」
「ちょっと待って、え～と・・・どうしよう。とりあえずわかるとこまで・・・」
ミーファはそう言うと、腰に付けている革の入れ物の中から、魔法陣を描くために持ち歩いている石灰岩を取りだし、床に魔法陣を書き始めた。しかし、途中で手が止まる。
「う～ん・・・あってるのかな？」
ミーファは立ち上がり、部屋の端から端を行ったり来たりしながら何かを考えている。部屋の外では剣の打ち合う音が響いていた。
「ミーファ、急がないとあの二人が」
エマが心配そうな声を上げる。
「待って。間違うと、ジェイルを精神崩壊させかねないの」
「そ、そんなに危険なのか」
「精神干渉系の魔法はかなり危険よ。と、とりあえずエマ！あの二人をここまで誘導して！」
「わかった」
エマはミーファをその部屋に残し、カイト達の元に戻った。

「カイト！向こうの部屋でミーファがジェイルを元に戻す準備をしている。なんとかジェイルを誘導出来るか？」
カイト達の元に戻ったエマが叫ぶ。
「わかった！なんとかやってみる。危ないから先に行っててくれ」
ジェイルの剣を受けながらエマに応えると、カイトは徐々にミーファのいる部屋へと近づいた。ジェイルもカイトを狙っているため、

その後に続く。カイトが打ち合いながらもミーファの部屋に入ると、ミーファはまだ部屋を歩き回っていた。
「ミーファ、いいのか？」
「あ、あはは。早かったね・・・まだです・・・」
ミーファはかなり引きつった顔で笑っている。
「おい！そんに待てねぇぞ！！」
「わ、わかってる！！もう少し待って！！」
「カイト、私も加勢するか？」
エマが自分の腰のレイピアを抜いた。
「いや、やめとけ。今のジェイルには躊躇が無い。半端な技量では殺られるぞ」
「くっ」
エマは弓の腕は一流だが、レイピアは護身術程度にしか使えない。とても、ジェイルの大剣を受けることはできない。
「ミーファ！！」
カイトが急かす。
「わかってるよ！！ちょっと静かにしてて！！え～と、操られているということは、恐らく自分の思考を制限されているんだと思うから、えーと、自我を失ってるのかな・・・」
ミーファはブツブツいいながら部屋を行ったり来たりしている。
「う～ん、まさか自我が崩壊しているの？いや、だったらただの獣だし、剣技なんて使える訳無いから・・・でもそれは、制限されてても同じかな？それに、制限されてるだけなら私達のことを覚えていないのも変だし。・・・う～、そうか、別な擬似的な自我を埋め込まれて、元々の自我を押し込められているのかも。だとしたら、元の自我を呼び戻すためには・・・」
ミーファは必至でマリオネットの解呪を考えているが、その間もカイトとジェイルは激しい戦いを繰り広げている。
ジェイルが大剣でカイトの腹部目掛けて横に薙ぎ払うのをカイトが後ろに下がってかわす。かわされた剣が壁にぶつかると、ジェイ

ルはさらに踏み込み跳ね返った反動を利用し今度はそのままカイトのふとももに目掛けて打ち下ろした。
「おわっ！！」

ーーー　ガッーーキィンーーー

カイトはあわてて、自分の剣を床に突き立てそれを防いだ。
「まったく、自称百戦錬磨は伊達じゃないな」
カイトの言うとおりジェイルの実戦だけで鍛え上げられてた剣技は一見荒削りで大雑把にも見えるが、隙がなく狙いも正確だった。何よりも両手持ち専用の大剣を片手でも軽々と振るその力は驚異的とも思えた。
ジェイルはその後も無言のまま剣を振り上げると一気にカイトの頭部目掛けて振り下ろした。カイトがそれを剣で受けた瞬間刃が欠け、その一つがカイトの顔を傷つけた。
「チッ。ドワーフ作の業物で結構高いんだぞ。後で弁償させてやる。しかし、これは受けるだけではもたないな」
さらにジェイルが突いてきた剣を横に弾くとカイトは後ろに飛んで間合いを取った。
「ジェイル。悪いがこっちも本気を出させてもらうぞ！うまくさばけよ！！」
そう言うとカイトは踏み込み剣を振り上げると、攻勢に出る。右斜め上から首を目掛けて斬りつけると、ジェイルは剣を左手に持ち、それを剣のガードの部分で受け止めると無造作にカイトの剣ごとそのまま下におろし、空いている右手でカイトの顔面を殴りに掛かる。カイトはそれをかわすと左手と首を使ってジェイルの右肘の関節を極め、そのまま投げに掛かるがジェイルは自ら前に飛んで一回転してそれを外した。そして、着地でバランスを崩したジェイルにカイトが剣を振り上げて叩き下ろすとジェイルはそれを剣で受けるが、カイトはその瞬間に足でジェイルの腹部を蹴り後ろに飛ばす。さら

にカイトが前に踏み込もうとするが、ジェイルは飛ばされたまま剣を横に薙ぎ、カイトの追撃を許さない。
「すごい・・・。あの二人、これ程の腕だったのか・・・」
傍らでその攻防を見ていたエマが感嘆の声を漏らす。
「しかし、これでは・・・ミーファ！！まだ掛かるのか？カイトが本気になってしまった。このままでは決着が着いてしまう！！」
「え？決着って？どゆこと？」
部屋を端から端を行き来していたミーファは突然声を掛けられたが、魔法陣の事で頭がいっぱいでカイト達の戦いを見ていなかったらしく何の事かわからない。
「どちらかが無事では済まない！」
「ええっ！！なにそれ。ちょっと待って。もう少しで何かわかりそうな気がする」
「急いでくれ」
エマはミーファを急かすが、ミーファも未だ解呪の答えが見つからない。
「わ、わかった。えっと、自我を戻すとなると・・・自我は生まれてからの経験によって築かれるものだから、ジェイルの本来の自我は過去の経験に基づいて成り立っているはず。それが表に現れてこないということは・・・どゆこと？？　う～～ん・・・過去の経験は～、そっか記憶だ。過去の記憶を封じ込めて、オクラの下僕となるような簡易的な記憶を植付けられてるのかもしれない。だからオクラの言うことに従い、私達のことは思い出せないのかも。ということは、過去の記憶を呼び戻せば本来の自我が前に出てマリオネットは解けるかもしれない！　う～、自信は無いけど、やるしかない！」
ミーファは途中で止めていた魔法陣を再度書き始める。
「ミーファ！出来そうなのか？」
「うん、多分・・・」
エマの問いにミーファは自信の無さか小声で頷く。その後、魔法

陣の記述を再開してからしばらく順調に書いていたが、途中で手を止め頭を抱えた。
「あれ～、ねぇエマ！記憶って古代文字でどう書くんだっけ？」
「え？私に聞いてるのか？人族の古代文字など私が知るわけないだろう」
「だよね・・・。あ、思い出した」
エマの焦りをよそにミーファは割とマイペースに魔法陣を書き進める。そして、書き終えると魔法陣用に細かく砕かれた魔石を要所に置いた。
「出来た！！カイト、ジェイルをこっちへ！！」
「なんだ出来ちまったのか。もう少しでジェイルと決着が着けられそうだったんだが」
カイトはミーファの呼び声におどけて見せるが、カイト、ジェイル共に既に体に数か所切り傷を負っていた。カイトの言葉に二人の戦いを傍らで見ていたエマは冗談には聞こえず、イラつきを見せる。
「馬鹿なこと言ってないで早くこっちへ」
「冗談だよ。二人とも端に寄っていてくれ。行くぞ」
カイトはジェイルに一度切りつけると、魔法陣の中に飛んだ。ジェイルもそれを追って魔法陣に入る。そして、ジェイルは渾身の力を込めてカイトに剣を振り下ろした。

ーーー　ガギィン　ッーーー

「ぐお！」
カイトはなんとかそれを剣で受け止めるが、ジェイルは離れずそのまま押し切ろうと力を込めて来たため、その場を動けない。
「カイト！！離れて！魔法陣の外へ！」
「だめだ。力を緩めると押し切られちまう」
「しょーがないな！！」
ミーファは片膝を付くと魔法陣の端に自らの杖を立て、魔法陣に

魔力を込める。それに呼応するように魔法陣と要所に置かれた魔石が青白い光を放つ。
「おい！！俺ごとやる気か？」
「大丈夫！マリオネットに掛かって無ければ影響は無い・・・・・・・・と、思う」
「思うって何だ！！信じてるぞ！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「何とか言ってくれ！！」
「一言だけ言っておくね！！私は解呪、やったことないから」
「何の念押しだ！！余計不安になるだろ！！」
「えーい！！大の男が細かいことを気にしない！！いくよ」
ミーファさらに魔法陣に魔力を込め、力ある言葉を発する。
『自己を形作る崇高なる精神よ、汝を封じる仮初めの記憶を滅し、過去の記憶と共に蘇り給え！！』
ミーファが普段の声とは違い、魔力を含んだ不思議な響きのある声で力ある言葉を唱えると、魔法陣はさらに強い光を発した。
「ぐわぁ！！なんだ、これはっ！！！！！」
カイトとジェイルは合わせていた剣を互いに落とすと、カイトは片膝を付き、ジェイルは天を仰ぎながら共に頭を抱えている。
「うがああぁっっ！！！ーーーマーーーキアーー」
ジェイルは悲鳴を上げると、そのまま両手両膝を付いて倒れ込んだ。

第二話　【9】

「ちょ、ちょっとやばかったかな・・・」
二人の様子を見たミーファとエマは若干引いている。
「カイト、ジェイル、大丈夫か」
エマが二人に駆け寄りるとミーファもそれに続き、カイトの近くで座り込んだ。
「ああ、なんとか。なんだ今のは？昔の事が一気に頭を駆け巡ったような感じだ」
カイトはまだ、頭を抱えている。
「ホントに？じゃあ、多分魔法自体は成功してる。そういう魔法だから」
「先に言えよ。死ぬ直前の走馬灯かと思ったよ。ジェイルは？」
三人はジェイルを見ると両手両足を付いた態勢で頭を横に振っている。
「・・・ジェイル？」
ミーファがジェイルに声を掛ける。
「ミーファの魔法か？てめぇ何しやがった！くそ、頭が痛てぇ。何だ今のは？」
ジェイルの言葉を聞いた途端ミーファは立ち上がりジェイルに駆け寄ると、その腹を思いっきり蹴り飛ばす。
「いてぇ！！何しやがる！！」
「何しやがるじゃないでしょ！！あんたねぇ、あんだけ大口叩いといて何あっさりマリオネットに掛かってんのよ！！」
「へっ？」
ジェイルは間の抜けた声を上げた。
「へっ、じゃなーーーい！！あたし達に斬りかかってカイトと斬り合って大変だったんだからね！！」
ジェイルは周りを見ると、自分の大剣が下に転がっているのを見

つけ、胡坐をかいて座り直すと記憶をたどる素振りを見せた。
「そういや、薄らとカイトと戦っていたような気もするな」
「気がするじゃないでしょ。『俺は精神力が強いから大丈夫』とか、あたしに『自分の心配してろ』とか言ってたくせに！自分が掛かってどうすんのよ！！」
日頃ジェイルにからかわれているミーファがここぞとばかり言い返している。ジェイルも反論できないらしく、額に青筋を立てながらも我慢していた。
「カ、カイト。止めたほうがいいのではないか」
その様子を見ていたエマが未だ頭を押さえているカイトに制止するように求めた。
「いいんじゃないか。まぁ、ジェイルにも油断があったろうし」
「しかし、ジェイルは私のせいでマリオネットに」
エマは自分を助けたために逃げ遅れたジェイルに申し訳なく思っているようだ。
「ん？ジェイルが何も言わないんだから、そんなことは気にする必要は無いよ」
「しかし・・・」
「仲間内で助けただの、助けられただの言ってたらきりが無いだろ」
「カイト・・・」
未だミーファはジェイルに小言を言っているが、ジェイルも我慢の限界に来たのか突然立ち上がった。
「あんの根暗野郎！！」
そして、その怒りは何故かオクラに向かう。立ち上がったジェイルは大剣を拾い上げてその部屋を出るとオクラを探しに行ってしまった。
「ちょ、ちょっとジェイル！！この館危ないって！！そこら中に魔法陣があるから！！」
ミーファも慌ててジェイルを追いかけた。
「俺達も行くか」

「あ、ああ。だが、オクラは逃げたのではないか？」
カイトは立ち上がると、エマもカイトに続く。
「逃げちゃいないさ。というより、オクラが俺達を逃がせないはずだ。どこかで高見の見物を決め込んでるんだろ。ジェイルのマリオネットが解けたことで、罠でも仕込んでるんじゃないか」
カイトとエマは先に出た二人を追って部屋を出ると廊下を見渡したが、既に二人の姿は確認出来なかった。
「さて、どこにいったのやら」
「また部屋を一つ一つ見ていくのか？」
「ああ、だが無闇に中に入るなよ。どうやら、いくつかの部屋は既に魔法陣が彫られているようだからな」
「わかった」

エマとカイトは部屋を確認しながら地下を進んでいくと、少し先の左曲がる角から青白い光が見えた。そして、その直後にミーファの声が上がる。
「ジェイルのあほ〜！！」
「……なんだ？」
エマが光の方を見る。
「今の光、陣魔法の光に見えたが…まさか、ジェイルのやつまた…エマ、行くぞ」
カイトが光が見えた方に向かって走り出し、エマもそれに続いた。角を曲がるとすぐ近くの扉が開いているのが見え、中から人の気配がする。カイトが中を覗くとミーファと部屋の中央で横たわるジェイル、そしてそのジェイルのすぐ近くに黒いローブを纏った老人、オクラが立っていた。
「ジェイル！！」
「カイト、気をつけて。魔方陣が彫られてるの！陣に中に入らないようにこっち来て！」
ミーファに言われてカイトは床を見ると、確かに何かの魔方陣が

彫られている。カイトとエマはその魔方陣内に入らないようにしながら部屋の内部に入ると、ミーファと合流した。
「どうしたんだ！ジェイルに何が？」
ジェイルは部屋の中央に横たわったまま起き上がらない。
「オクラがこの部屋にいるのを見つけたんだけど、ジェイルが危ないって言ったのに『ぶっ飛ばす』って言いながらいきなり踏み込んじゃって…魔方陣の餌食に…」
「ジェイルは魔法に疎いからな…ジェイル、大丈夫なのか」
「大丈夫。これスリープの魔方陣だから寝てるだけ」
「そうか。じゃあ、とりあえずジェイルは放っておこう」
「いいのか、それで…」
エマが心配そうな声を上げた。
「大丈夫だ。危ないと感じたら勝手に起きるよ」
「どういう意味だ？」
「あいつもアホじゃないってことだ。どの道ジェイルが魔方陣の上にいる以上手が出せないしな。それよりオクラをなんとかしよう」
カイト達が話している間にオクラはジェイルから少し離れたが、魔方陣からは出ようとしない。
「くっくっく。マリオネットを解くとは。メイド五号がこれほどの魔法士とは予想外じゃったよ」
「だから、五号って言うな！！」
「くくく。さぁ、その男を助けないのか？」
オクラはジェイルを杖で指し、あからさまに魔方陣に入るように誘う。
「まいったな。ジェイルが人質になっちまった」
「なんとかジェイルを起こせないかな？」
「起こすだけならすぐ起こせるが、魔方陣内にいる限りはまた眠らされるだけだろ」
「近づかずに起こせるの？魔法での眠りは通常よりも深いから声とかじゃ無理だよ？」

「知ってる。まあ、それより魔法でオクラを倒せないのか？」
「え、あ、うん。やってみる」
ミーファは腰の杖を取りオクラに向けた。
「火よ」
ミーファの声に呼応し、杖の先端の魔石から火球がオクラに向かって飛来する。
「そんなもの、儂には効かぬよ。霧よ」
オクラはその火球が届く前に杖を掲げると、杖から濃い霧が発生しオクラの周辺を覆った。火球はその霧に触れると消えてしまった。
「なんだ、消えちまったぞ」
「あいつ、意外と強いかも。霧は水の魔法の応用で、結構高等な魔法なの」
ミーファはオクラを見ながら悔しそうな顔をしている。
「なるほどね。魔法士協会元理事の名は飾りじゃないわけだ」
「私が射るか？」
エマは既に背負っていた愛用の弓を組み立てていた。
「ああ、やってみてくれ」
カイトがそう言うとエマは矢を一本引き絞り、オクラの足目掛けて放ったが、オクラは微動だにしない。
「無駄だよ。風よ、そして火よ！！」
オクラが発生させた風で矢の方向が変えられ矢はオクラの後ろの壁に突き刺さった。その直後にオクラから放たれた火球がカイト達に飛来する。
「風よ！！」
その火球をミーファは発生させた風で横の石壁にぶつけると火球は石壁の一部を焦がし消えた。
「むむむ。あの速度で別系統の魔法を連発できるなんて…」
ミーファは悔しそうな表情をしている。どうやらミーファにはそこまでの連発は出来ないようだ。しかし、オクラもそれ以上の連発をして来ないところを見ると、ミーファや弓を使えるエマがいる以

上あまり自分から攻めたくないのか、あくまで魔法陣に入るように誘っている。
「う～む、間合いがこれだけあると魔法士は厄介だな。かといって間合いを詰めるわけにもいかないし」
「くっくっく。地上への扉は既に閉めた。お主らは逃がさぬよ。特に五号とそこの金髪娘は私の研究の実験材料にしてくれる。くくく」
オクラの表情には余裕が伺える。間合いを詰められることが無ければ、自らの魔法に自信を持っているのだろう。
「勘弁してよ…あんたのあんな研究の材料にされるなんてまっぴらゴメンよ！！」
ミーファは本気で怒っている。
「さっき説明の途中だったが、あいつの研究ってなんだんだ？」
「最悪の研究よ。あれが成功したらと思うと…」
ミーファは恐怖のためか肩を震わせた。
「あんたは絶対ここで倒す！！」
ミーファはオクラに杖を突きつけた。その表情には並々ならぬ決意が伺える。
「なんだかよくわからんが、とりあえずやばそうだな。しかし、どうするか。俺、遠距離系の攻撃できないんだよな」
「う～ん、あたしもあいつと魔法勝負はあまり自信がないな…・・・」
ミーファは基本的に自分の魔法にかなりの自信を持っているが、オクラの技量程ではないのかめずらしく弱気になっている。それでも、何か手は無いかと部屋中を見まわしていると、急に何かを閃いたのか手を打ち合わせた。

第二話　【10】

「あ、いいこと思いついちゃったかも。ねぇ、エマ。三本くらい連続で矢を撃てる？」
「出来ないことは無いが、また風で防がれるのではないか？」
「それでいいの。あいつの集中力を乱してくれれば」
「わかった。やってみよう」
何かを思いついたミーファは二人の前に出る。エマはカイトの影で矢を三本準備するとミーファの合図をまった。
「くっくっく。何をしても無駄じゃよ。嵐よ！！」
その様子にオクラが先手を打ってきた。オクラが杖を掲げると、水を含んだ風がカイト達三人に吹き付ける。
「きゃあ！！」
ミーファは吹き飛ばされそうになるのはカイトが支えるが、風に水分が含まれているため、通常の風よりも重く、カイト自身立っているのがやっとの状態でそれ以上何も出来なくなっていた。
「ぐぅ、混成魔法まで使うなんて！！ここまで出来る奴がなんであんな研究を」
混成魔法とは二つの自然魔法を同時に使う技術であり、かなり高度な魔法である。今オクラが使った魔法は水の魔法と風の魔法を同時に使用し風に水分を含ませて威力を増していた。
「くっくっく。お主にはわかるまい。ロマンというものが！！」
「何がロマンよ！！今よ、エマ！！」
オクラが発生させた嵐が止むのを待ってミーファが叫んだ。エマはその言葉にすぐさま反応し、オクラに向けて矢を連続で三本放つ。
「ばかめ。無駄だと言っておろう。風よ！！」
放たれた矢の方向を変えるためにオクラは風を発生されたが、三本連続で飛来してくるため、先ほどよりも長く魔法を維持させられている。

「バカはあんたでしょ！！魔方陣は描いた本人じゃなくても使えるのよ！！」
ミーファは魔方陣の端に片膝を付くと、杖を付きたて魔法陣に一気に魔力を込めた。
「な、なんじゃと！！お主、禁呪の言葉を知っておるのかっ！！」
「うるさい！！余計なことは言わなくてよし！！」
ミーファはオクラに何か口止めをすると、さらに魔方陣に魔力を込め、力ある言葉を発する。
『人の中枢たる魂よ。万物との繋がり今一時忘れ、深遠なる安らぎを求めよ！！』
ミーファの声に反応した魔方陣はさらに輝きを増した。
「しまっ……くかぁー」
魔方陣の中にいたオクラは倒れこむとそのままいびきをかいて寝てしまった。
「……え、終わり？」
その様子を見ていたカイトは拍子抜けしたように声を上げた。
「まぁね」
そう言うミーファは胸を張って得意気だ。
「なんだか、最近出番が無いな．．．．．」
ミーファとは対照的にカイトはどことなく寂しげだった。
「さて、ジェイルを起こすとするか」
三人はジェイルに近づくとミーファはジェイルの悪口を言ったり、髪を引っ張ったり、顔を軽く叩いたりするが起きる気配がない。
「やっぱ、簡単には起きないよ」
「まあ、もとより寝起きが悪いしな」
「どうするのだ？担いで連れて行くのか」
「いや、起こすよ。危ないから少し離れてくれ」
「危ない？」
「どういうことだ？」
エマとミーファはカイトの言っていることがわからなかったが、

言われたとおりカイトと共にジェイルから少し離れた。
「まあ、慌てるなって」
カイトはジェイルの方を向き直ると、目を閉じた。そして、次に目を開けた瞬間、部屋の空気が一変する。その空気の変化にジェイルは跳ね起きると背中の大剣の抜いた。エマもその気配に気付き、カイトから離れると腰のレイピアに手を掛ける。
唯一ミーファだけは何事かわからずキョトンとしている。
「…カイト？」
エマはカイトに怪訝な表情を向ける。
「わるいわるい、エマも気付けるとは知らなかった」
「何だ今の殺気は？カイト、おめぇか？」
大剣を構えたジェイルは、周りに注意を払い殺気が消えていることを確認すると剣を背中の鞘に収めた。
「ああ、お前が起きないんでな。ちょっと荒っぽく起こさせてもらったよ」
「……何が、何なの？」
ミーファは未だ何が起こったのかわかっていない。
「なるほど。お前の言っていた、危なくなったら勝手に起きるというのはこういうことか」
「なんだか頭がぼーっとするな。俺、眠らされてたのか？」
ジェイルは三人に寝ぼけた顔で近付いてくる。
「まったく、油断しすぎだ」
「すまねぇ。魔法士は苦手だぜ。オクラの野郎は？」
「そこでミーファが眠らせた」
ジェイルはカイトの差した方を見ると、オクラが眠っているのが見えた。ミーファがやったと聞きまた小言を言われるのかとジェイルがミーファの方を見ると、ミーファはエマと話していた。
「ねぇ、エマ。何が何なの？何で何もしてないのにジェイルは起きたの？」
一人話しについていけないミーファはエマに助けを求めている。

「気付かなかったのか？カイトがジェイルに対して殺気を放ったのを？」
「殺気？」
「ああ、その殺気に気付いてジェイルが飛び起きたようだ」
「全然…それって気付けるものなの？」
「我々エルフ族はそういったものには敏感だが、私は寝むっていたら気付かない。人族は気付くのが普通なのかどうかはわからない」
「普通じゃないと思うけど…」
ミーファはエマの説明を聞いて何が起こったのかは理解したようだが、驚きと疑惑の表情を浮かべた。
「ミーファ。で、結局オクラは何を研究してたんだ？」
カイトから声を掛けられ、ミーファはそちらを振り向いた。
「え？あ、ああ。それが、かなり恐ろしいというか、おぞましい魔法よ」
「マリオネットとスリープじゃねぇのか？」
ジェイルもカイトに続く。
「違うよ。というか、マリオネットとスリープはある意味完成された魔法だから、それ自体を今さら研究することは無いの。オクラが研究していたのはマリオネットを応用した魔法よ」
「応用？」
「さっきの本があった部屋に行こう。そこで説明するよ。…説明するのもおぞましいけど…」
ミーファの表情にはまた恐怖の色が浮かんだ。
四人はさっきのオクラが書いたと思われる本が置かれている部屋へと戻ると、ミーファは先ほど手にした本を開いて三人に見せた。
「いや、だから古代文字だから俺たちは読めないんだが…」
「あ、そっか。ここにこの魔法の名前が書いてあるんだけど…」
ミーファは開いたページの最初の方に書いてある太字を指差した。
「なんて書いてあるんだ？」
ミーファは恐怖の表情を浮かべながら、そこに書かれてある文字

を読み上げた。
「……若い女を惚れさせる秘法……」
『……は？』
三人の間の抜けた声が重なる。
「こんな恐ろしい魔法を研究しているなんて…幸い、まだ完成はしていないみたいだけど…」
ミーファは自らの肩を抱き、震えている。
「いや、確かに恐ろしい魔法ではあるが…、秘法って…」
「人族の男の頭の中はそれだけなのか？」
「俺に魔力が無いことが残念だ…」
呆れているカイトとエマ、興味を示しているジェイルをよそに、ミーファは声を張り上げる。
「何をのん気なことを言ってんの！！もしこれが成功したら、この街の若い女の子はみんなオクラの虜になってしまうのよ！！」
「うらやましい限りだ」
「あほぅ！！」
「痛てぇ」
ジェイルの言葉にミーファは思わず足を踏む。
「しかし、ミーファ。お前、魔法士学校でも教わらない禁呪をよく見ただけでわかるな。そういえばさっき禁呪を使わなかったか？」
「えっ……。いや、え～と、魔法士のたしなみってやつ・・・」
ミーファは人さし呼びを頬の横に立て、にこやかにごまかそうとするが、額にはびっしり汗を書いている。
「お前・・・依頼内容を聞いた時から態度がおかしかったが、普段ニヤケながら読んでる魔法書って・・・」
「ニ、ニヤケながらって失礼な！・・・だって、合法的な魔法は大体勉強しちゃったし、禁呪っておもしろいんだもん。でも、使ったのは初めてだよ！今回はそれで助かったわけだし～・・・」
ミーファはわざとらしくいじけて見せる。
「別にお前がそれで何かしでかすとは思わないから俺は構わんが、

ほどほどにしとけよ」
「カイト、甘ぇよ。ミーファだって年頃の女だぞ。好きな男を虜にする魔法の研・・・」

ーーー　ゴィンッ！！　ーーー

「お前、杖で・・・」
　ミーファがジェイルの頭を杖で殴りつけると、悲鳴も上げられないほど痛かったらしく涙目でうずくまった。ちなみにミーファの杖は金属製の高級品である。
「ま、まあ、とりあえずこれで証拠は見つけたわけだし、それを魔法士協会に持っていけば、オクラは憲兵に捕まってもう研究を続けられないだろ。オクラもしばらくは起きないだろうからとっとと魔法士協会に報告しよう」
　カイトがジェイルに同情の目を向けながらそう言うと四人は館の外に出た。外は既に夜が明けて明るくなっていたため、その足で魔法士協会へと向かうことにした。

第二話　【１１】

「…と、いうこと訳だったんです。それで、その研究の証拠がこれです。他にもオクラの館の地下に魔方陣が刻まれていましたから、それらも証拠になるかと」

魔法士協会に戻った四人は依頼内容を聞いた部屋と同じ部屋に通されると、カイトが理事のリガルにオクラが研究していた内容と、その証拠となる本を手渡した。

「やはり、それ系の魔法であったか…」

リガルは予想通りと言った反応を示した。

「それ系？知っていたんですか？」

「いや、研究内容自体を知っていたわけではないが、そういった事を研究しておるのではないかとは思っとったよ」

「？？？。…ちなみに、差し支えなければ、オクラが魔法士協会を破門になった理由というのを教えて頂けませんか。たしか依頼内容を聞いたときには『別件で』と言われていたということは、ここで秘密裏にこの研究をしていた訳ではないようですが？」

「う～む。魔法士協会の汚点でもあるのだが…。まあ、解決してもろうたし良かろう。実はな、オクラの奴めは優秀な男なのだが、エロジジィでな。協会の女の子にはむやみに触るわ更衣室は覗こうとするは、挙句の果てには理事の権力を振りかざし協会職員の女性用ローブをやたらと丈の短いもの変えてしまいおった。それで、あまりにも職員からの苦情が多くて、やむなく破門にしたのじゃ」

「……女の子の敵ね…」

ミーファの冷たい声が響く。しかし、その隣りでジェイルはその話に真剣に耳を傾けると、部屋の窓から青空に浮かぶ雲を眺め呟いた。

「オクラってなぁ、あの歳になっても男のロマンを追いかけていたのか。わかる、わかるぜ。…俺もそうやって歳を取りたいもん……

ぐぉ！！」
　ジェイルはオクラに共感を示し、自らの思いを語ろうとしたがミーファに拳で引っ叩かれ、頭を抱えた。
「これは、人族の特殊な例と考えていいのか？」
「当然だ…ジェイルも含めてな」
　さすがのエマも内容が内容だけに人族として一般化することは出来なかったようだ。
「ふむ。お主達ご苦労であった。約束通り報酬を払おう」
　そう言うとリガルはカイトに報酬の金貨六枚を渡した。
「どうも」
　カイトはそれを受け取ると握り締めた。リガルは証拠の本をめくり中身を確認すると、一瞬目を見開いた後に予想外な事を口にした。
「うむ。ではこの研究は協会の方で引き継ごう」
「引き継ぐなぁ！！！！！！火よ！！」
　リガルの言葉にミーファはその本を取り上げ空中に投げると火の魔法で燃やしてしまった。
『あああああっ！！もったいない！！』
　リガルとジェイルの叫びが重なる。
「どあほう！！！」
　ミーファの蹴りがリガルとジェイルのみぞおちを正確に捉え、二人は同じ格好でうずくまった。
「…証拠、いいのか？」
「まあ、魔方陣もあるから捕まえるのには問題ないだろ？報酬ももらったし、宿で山分けするか」
　カイトとエマは未だ言い合いをしている三人を残し、魔法士協会を後にした。
～おしまい～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8242t/

ワンダラー放浪記

2011年6月14日19時11分発行